

学級づくり ガイドブック

■好ましい人間関係を育む学級づくり■

令和 6 年 3 月



千葉県総合教育センター



目次

I	はじめに【学級づくり理論編】	1～5
1	「学級づくり」とは？	
2	「好ましい人間関係」とは？	
3	どのような学級を目指すのか？	
4	本書における学級づくりの全体構想	
II	学級づくりの進め方	6～9
1	P D C A サイクルで学級づくりをする	
2	学級づくりを進める上での留意点	
III	学級開き	10～11
1	児童生徒を迎える準備	
2	思いを伝える	
3	ルールの確認をする	
4	学級目標を決める	
IV	教師と児童生徒の信頼関係	12～15
1	教師としてのふるまい	5 凡事徹底
2	自己開示	6 感謝の気持ちを伝える
3	率先垂範	7 コーチング
4	児童生徒理解	8 Iメッセージ
V	児童生徒同士の人間関係	16～23
1	集団を育てるとは「つながり」をつくること	5 ピア・サポート
2	人間関係を築く場面	6 学級の状況を把握する
3	ブレインストーミングからのKJ法	7 教師が模範となる
4	アサーション	8 「つながる」「貢献する」「自信をもつ」のサイクル
VI	主体的に活動できる学級	24～29
1	学級づくりに欠かせない話し合い活動	
2	係活動の充実	
3	自発的、自治的な活動	
VII	同僚・保護者との関係づくり	30～35
1	同僚の教職員とのかかわり	
2	保護者は児童生徒の成長と一緒に見守るパートナー	
VIII	資料	36～40
1	アンケート調査	
2	モニターによる活用調査	

学級づくりガイドブックの使い方の例

1. 「学級づくりセルフチェックシート」でチェックしてみる。
自分自身の「学級づくり」について振り返ることができます。
2. 対応する Action（改善策）も併せて見て、気になったガイドブックのページを読む。
 - ・セルフチェック項目に対応するページが書かれています。
 - ・自分自身の「学級づくり」についての振り返りを基に、興味・関心のあるページを読んでみましょう。
3. 学級づくりの取組を考える。
これからの「学級づくり」のためにできることは何かを考えてみましょう。

PDCAサイクルで学級づくりをする

Plan 計画する

- ・目指す学級の姿（ゴール）を決める。
- ・学級の実態（スタート位置）を把握し、戦略を立てる。

Do 実践する

d : 実践する c : 振り返る（評価する）
a : 改善する
※上記を一連の活動として繰り返す。a → d → c

Action 改善する

学級づくりの取組を考える。

Check 評価する

「学級づくりセルフチェックシート」
でチェックしてみる。

「セルフチェック」の手立てとしての活用を！

学級づくりのために大事なことの 하나가「自分の活動を振り返る」ことです。

教師は、日々の実践がゴール（目指す学級像）に向かっているか、学級づくりを評価する（Check）機会をもちましょう。その手立てとして、学級をチェックする「学級づくりセルフチェックシート」を活用してみてください。

チェックしてみて気になったところは、「学級づくりガイドブック」を参照して、日々の学級づくりの参考にしてみてください！

学級づくりセルフチェックシート

「学級づくりセルフチェックシート」を使って、定期的に学級づくりについて振り返ってみましょう。
チェックした項目について、「学級づくりガイドブック」の対応するページを参照し、これからの学級づくりの取組を考えるヒントにしてみてください。

ガイドブック 対応する章	4：よく当てはまる　3：当てはまる　2：あまり当てはまらない　1：当てはまらない				対応する Action（改善策）	ガイドブック このページを チェック！ ページ を クリックして ジャンプ！
	学級づくり セルフチェック項目	自己評価 ☒				
		4月	9月	1月		
Ⅰ 【はじめに 学級づくり理論編】	① 「学級づくりとは？」という問い に対する自分なりの考えがある。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	生活・学習集団として目指す 姿を確認しよう！	→ P1
	② 学級における「好ましい人間関 係」のイメージを自分なりにもっ ている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	互いに「尊重する」ことの大切 さを確認しよう！	→ P1
	③ 国や千葉県において、どのような 学級づくりが求められているか 知っている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	学習指導要領や千葉県の指 針等から確認しよう！	→ P2～5
Ⅱ 学級づくりの進め方	④ 学級づくりのための計画（Plan） をどのように立てるか理解してい る。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	スタート位置（実態）を把握 し、ゴールを決めよう！	→ P6
	⑤ 学級をよりよくしようと思って学 級づくりをしている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	「振り返り」を大切にし、「改 善」をしよう！	→ P7
	⑥ 児童生徒に寄り添いながら、一貫 性をもった指導をするためのポイ ントを理解している。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	「教育観」をもち、学級づくりを 進めよう！	→ P8～9
Ⅲ 学級開き	⑦ 「学級開き」の重要性を把握して いる。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	学級集団としてのスタートを大 切にしよう！	→ P10
	⑧ 学級開きの際に、ポイントを押さ えて進めることができている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	「学級開き」のいくつかの事例 から、そのポイントを学ぼう！	→ P10～11
	⑨ 学級目標や、その立て方について 興味・関心がある。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	「学級目標を決める」実践事 例から学ぼう！	→ P11

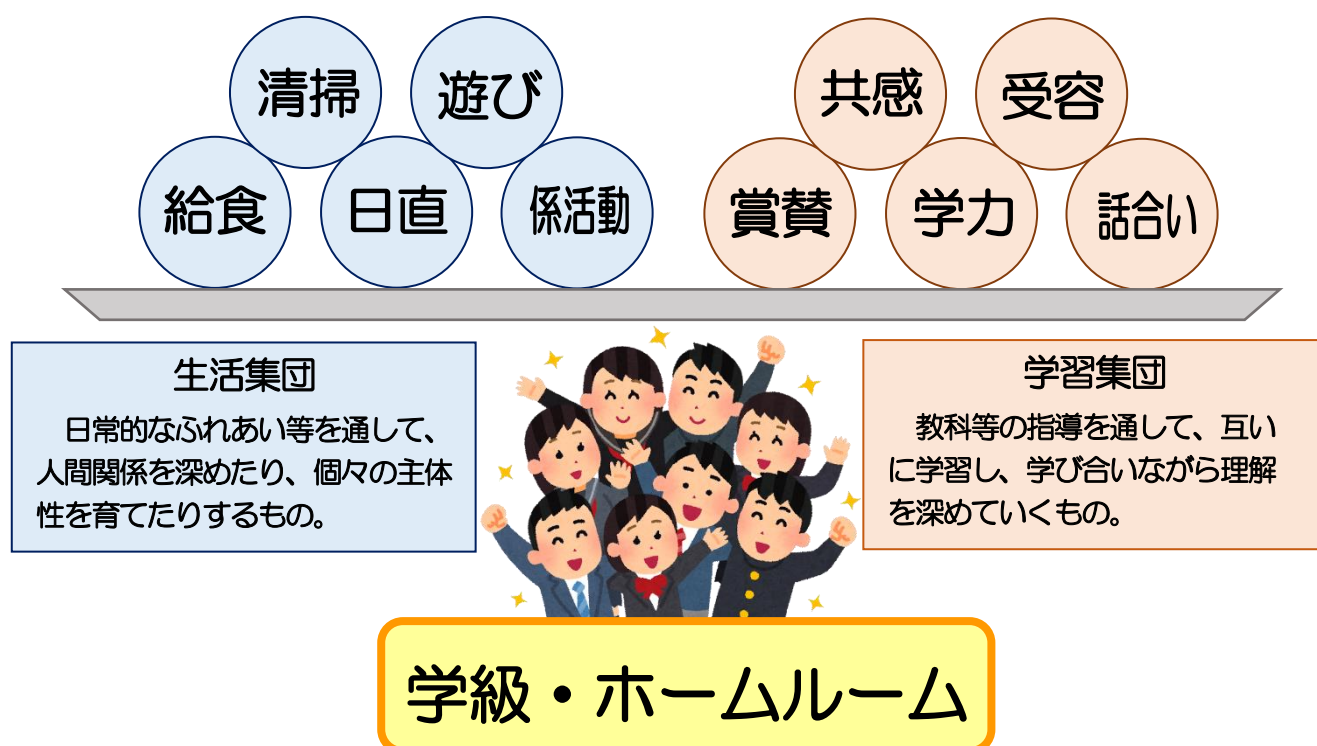
IV	教師と児童生徒の信頼関係	⑩ 教師として望まれるマナーやふるまいを理解し、行動している。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	児童生徒を尊重したふるまいをしよう！	→	P12
		⑪ 児童生徒の実態を理解し、個に応じた指導をすることができている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	一人一人の思いや特性を理解し、正対して向き合おう！	→	P13
		⑫ 児童生徒と信頼関係を築くために日々のコミュニケーションを大切にし、行動している。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	日々のコミュニケーションや当たり前を見つめ直そう！	→	P14
		⑬ 児童生徒の意思を尊重したコミュニケーションがとれるよう、努めている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	コーチングやメッセージ活用を通して主体性の尊重を！	→	P14～15
V	児童生徒同士の人間関係	⑭ 児童生徒同士の人間関係を育むための考え方について興味・関心がある。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	集団づくりの考え方を理解し、実践を進めよう！	→	P16～23
		⑮ 行事や授業において人間関係を育むためのポイントについて理解している。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	日々の生活の中で人間関係を育もう！	→	P17・19
		⑯ 児童生徒同士の人間関係を育む話し合い活動をしている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	人間関係を育むことをねらいとした話し合い活動を！	→	P18・20
		⑰ 様々なグループアプローチを通して、児童生徒の人間関係を育もうとしている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	様々なグループアプローチを学級づくりに活用しよう！	→	P16～22
VI	主体的に活動できる学級	⑱ 児童生徒の主体性をいかした話し合い活動を行っている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	事前準備や進行を工夫して、主体性をいかそう！	→	P24
		⑲ 形態やツール（思考ツール・ICTなど）を工夫して話し合い活動をしている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	自分の考えをもち、考えの共有を図ろう！	→	P25～26
		⑳ 児童生徒が主体的に係の活動ができるよう工夫をしている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	考えや思いを表現し、試行錯誤できる係活動を！	→	P26～27
		㉑ 児童生徒が自発的、自治的に活動できるようにしたいという思いがある。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	多様な実践を知り、実態に合った取り組みを！	→	P28～29
VII	りと同僚の関・保つく者	㉒ よりよい学級づくりのために、他の教職員と連携・協力することができている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	校内のコミュニケーションを大切にして、協力体制を築こう！	→	P30～32
		㉓ 保護者の願いを理解し、協働することができている。	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	4:□ 3:□ 2:□ 1:□	お互いの思いや考えを伝え合い、共通理解を図ろう！	→	P32～35

I はじめに【学級づくり理論編】

1 「学級づくり」とは？

本書では、「目指す学級の姿を明らかにし、教師と児童生徒の信頼関係や児童生徒同士の好ましい人間関係を築くことを通して、学級を一つにまとめていく取組」ととらえています。

学級は、教師にとって学習指導や生徒指導を行う際の基盤となる集合体であり、児童生徒にとっても学習や生活など学校生活の基盤となるものです。学級が安定することで、十分な教育的効果が期待されると考えられます。そのため、年度当初の出会いから始まる集団を、様々な教育活動の中で共に認め、励まし合い、支え合える生活集団・学習集団にしていく必要があります。



2 「好ましい人間関係」とは？

「お互いに尊重し合うことを基本とした人間関係」です。「尊重する」とは、違いを認めた上で相手を受け入れ、そして理解する、つまり、自分と違った考えをもっている相手でも、人として受け入れるということです。これは、教師と児童生徒、児童生徒同士の両方に言えます。

このことにより、児童生徒は安心感を味わい、自分を素直に表現することができるようになり、ありのままの自分を肯定的にとらえる自己肯定感や、他者のために役立った、認められたという自己有用感を育むことができるようになります。



3 どのような学級を目指すのか？

本書では、「教師と児童生徒の信頼関係を基盤とし、児童生徒同士が互いに尊重し合い、自分たちで考えて行動できる学級」を目指します。

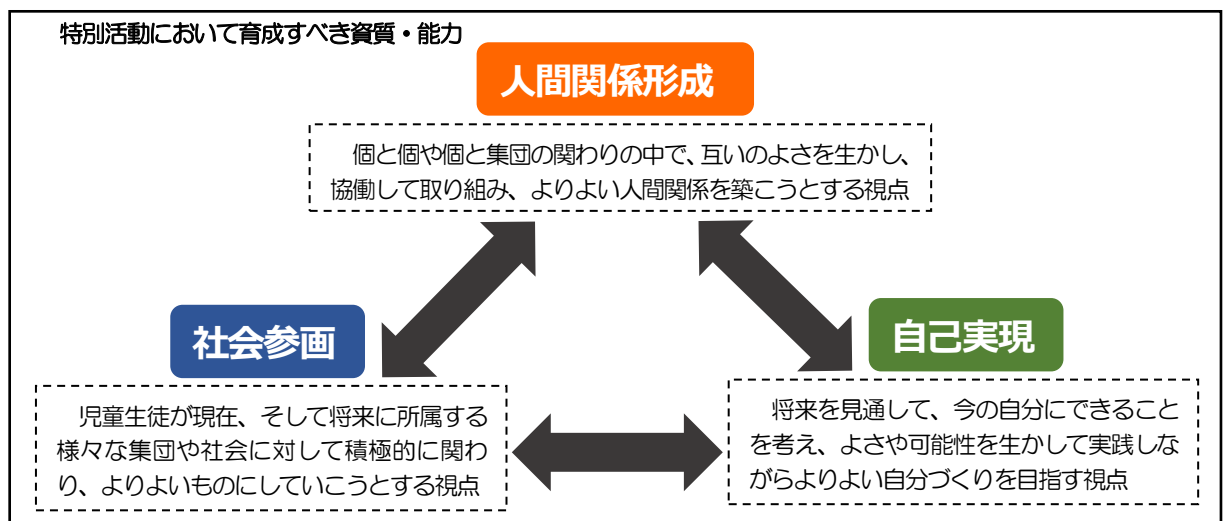
これは、「学習指導要領解説『総則編』『特別活動編』『生徒指導提要（令和4年12月）』及び令和3年に実施した『学級づくり』に関する実態調査（県内小・中・義務教育・高等学校・特別支援学校経験年数1～10年目の教員を対象4,658件）」「第3期千葉県教育振興基本計画」を参考にしています。



（1）学習指導要領における学級・ホームルームづくりの位置付け

学習指導要領解説「総則編」では、「学習や生活の基盤として教師と児童（生徒）との信頼関係及び児童（生徒）相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級（ホームルーム）経営の充実を図ること」と述べられています。これまで学習指導要領解説『総則編』においては、小学校にのみ学級経営の充実が位置付けられていました。しかし、中央教育審議会（平成28年12月）において、学校や学級の重要性が、今一度見据え直されたことを受け、中学校、高等学校においても教師と生徒との信頼関係及び生徒相互のよりよい人間関係を育てるために、学級経営の充実を図ることが位置付けられました。

また学習指導要領解説「特別活動編」では、「学級活動における児童（生徒）の自発的、自主的な活動を中心として、個々の児童（生徒）についての理解を深め、教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図ること。」と示されています。さらに、育成すべき資質・能力の重要な視点として、以下のものが示されています。



つまり、様々な教育活動を通して、児童生徒の主体的・実践的な資質・能力を育むとともに、児童生徒との信頼関係を構築し、学級・ホームルーム経営の充実及び改善を図っていくことで、学習活動や学校生活の基盤としての学級という場を豊かなものとしていくことが重要であるということです。

(2) 生徒指導提要（令和4年12月）における学級・ホームルームづくりの充実

生徒指導提要では学級づくりについて、「学級集団としての質の高まりを目指したり、教員と児童生徒、児童生徒相互のよりよい人間関係を構築しようとしたりすることが中心的な内容と言える」と示されています。

また、「学級・ホームルーム経営では、児童生徒自身が学級や学校生活、人間関係をよりよいものにするために、皆で話し合い、皆で決めて、皆で協力して実践することを通じて、学級・ホームルームの友達のよいところに気付いたり、良好な人間関係を築いたり、学級・ホームルームの雰囲気がよくなったりすることを実感すること」とあります。このような自発的、自治的な活動を通して、学級・ホームルーム経営の充実を図ることで、児童生徒同士が、お互いを尊重し合う温かい風土が醸成されるとともに、自ら考え、行動できる集団になるということです。

(3) 第3期千葉県教育振興基本計画より

基本目標1 ちばの教育の力で、志を持ち、未来を切り拓く、ちばの子供を育てる

施策1 人生を主体的に切り拓くための学びの確立

(1) 子供の学習意欲を高め学力向上を図る取組の推進

基本目標2 ちばの教育の力で、「自信」と「安心」を育む学校をつくる

施策5 人間形成の場としての活力ある学校づくり

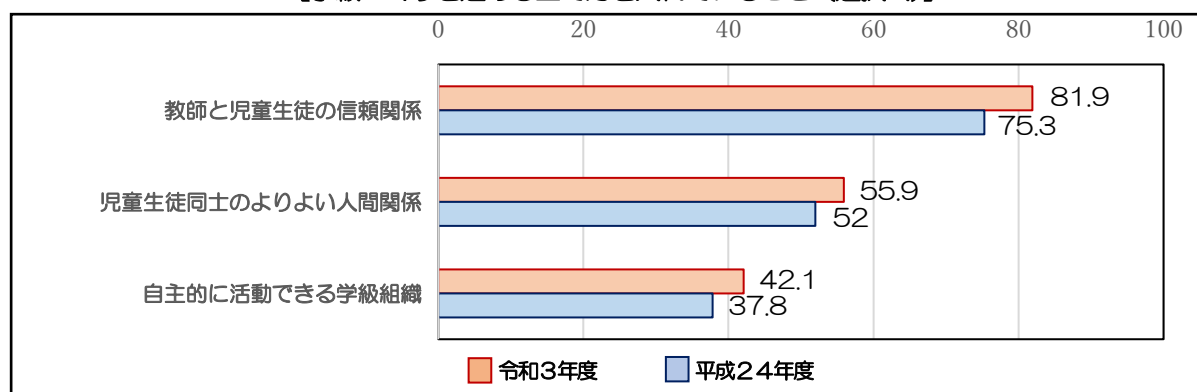
(2) 豊かな学びを支える学校・学習環境づくり

本県の施策においても以上のように、よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実が示されており、学級の重要性がうかがえます。

(4) 「学級づくり」に関する実態調査結果から

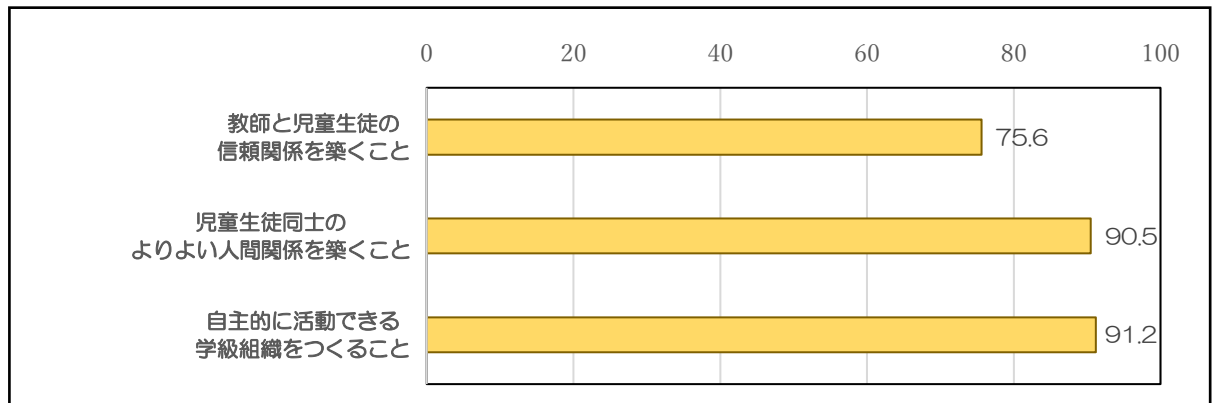
令和3年度、県内小・中・義務教育・高等・特別支援学校に在籍する教員経験1年目から10年目の教員4,658名を対象にアンケート調査を実施しました。アンケート項目については、前回の調査（平成24年度）と同様の内容を実施することで、教員の意識の変化を捉えることができるようにしました。

【学級づくりを進める上で力を入れていること（選択式）】



平成24年度と比べ、「学級づくりを進める上で力を入れていること」として、これらの3項目についての意識が高まっていることが分かります。

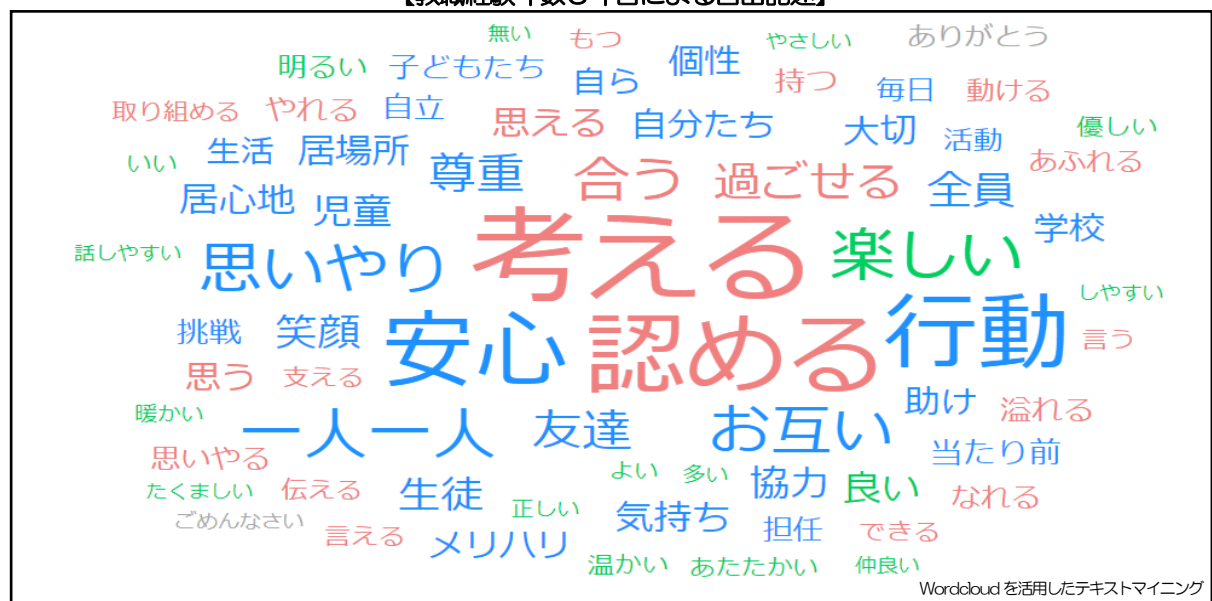
【学級づくりを進める上で難しいと感じていること（選択式）】



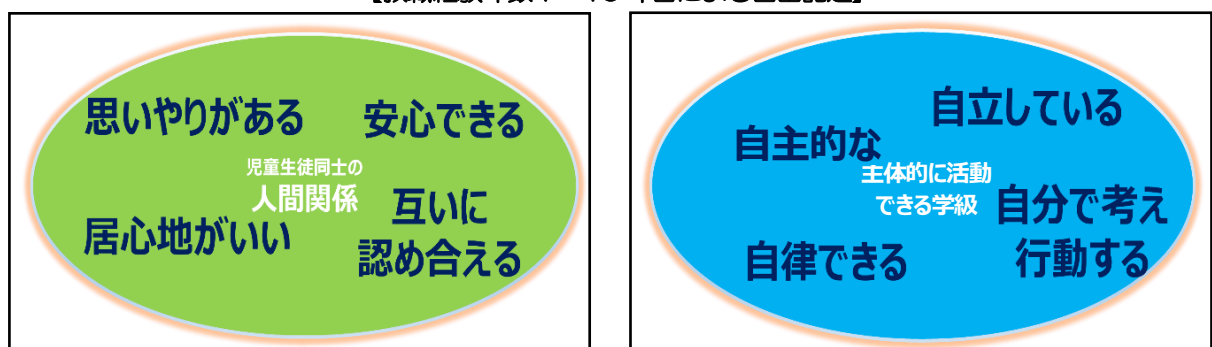
一方、上記「学級づくりを進める上で難しいと感じていること」のアンケートから、児童生徒との信頼関係をどう築いていくのか、その上で、児童生徒同士の人間関係をどう深めていくのか、そして、児童生徒一人一人が自ら考え活動できるような学級組織をどう築いていくのかということを、日々悩み模索している様子がうかがわれます。

さらに、どのような学級をつくりたいかという自由記述回答をみると、「児童生徒同士の人間関係」に大きく関わる部分や、「主体的に活動できる学級」に関わる部分の回答が多くみられました。

【教職経験年数5年目による自由記述】



【教職経験年数1～10年目による自由記述】



これらのことから、「児童生徒との信頼関係」「児童生徒同士の人間関係」「主体的に活動できる学級」の三つを柱とし、それらが相互に関わっていくことで教員が求めている学級の姿へとつながっていくのではないかと考え、本書で目指す学級の姿としました。

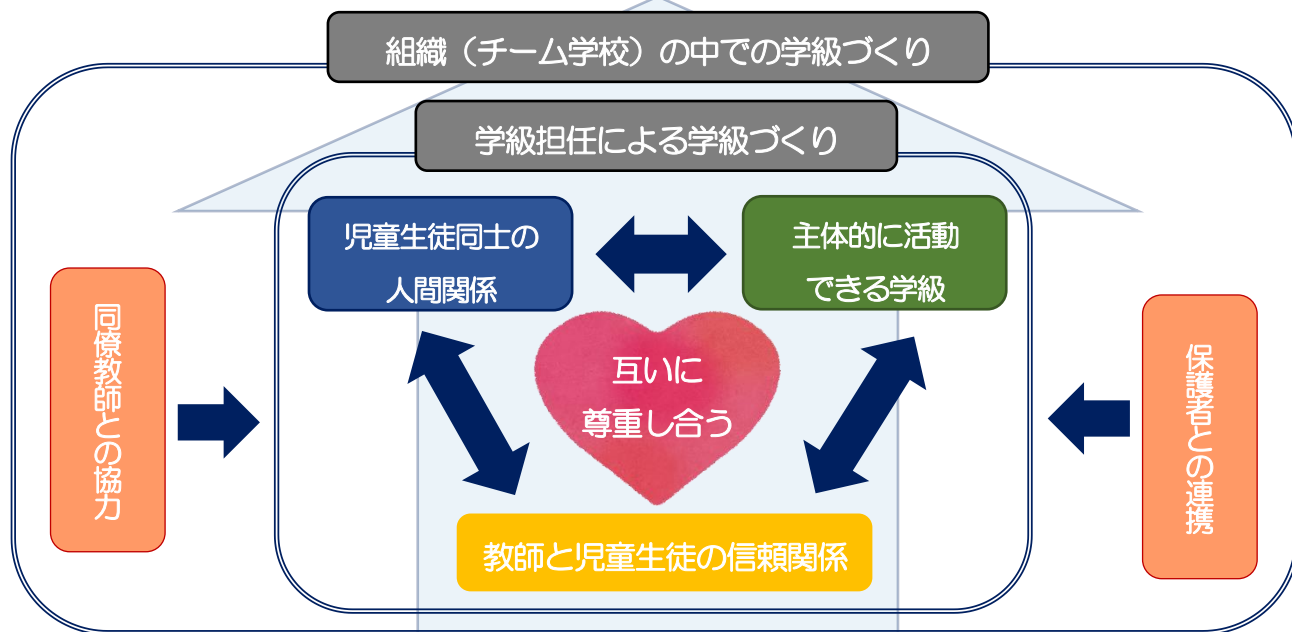
4 本書における学級づくりの全体構想

○ 学習指導要領解説「総則編」「特別活動編」

- ・学習や生活の基盤として教師と児童（生徒）との信頼関係及び児童（生徒）相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級（ホームルーム）経営の充実を図る
- ・学級活動における児童（生徒）の自発的、自治的な活動を中心として、個々の児童（生徒）についての理解を深め、教師と児童（生徒）、児童（生徒）相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図る

○ 第3期千葉県教育振興基本計画

よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実



【好ましい人間関係を育む学級】

教師と児童生徒との信頼関係を基盤とし、児童生徒同士が互いに尊重し合い、自分たちで考えて行動できる学級

○ 令和3年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙結果（千葉県）

本県小学校及び中学校において全国平均より0.3ポイントから3ポイント低くなっている項目

番号	質問事項	小学校	中学校
6	自分には、よいところがあると思いますか	-2.5	-2.6
10	人が困っているときは、進んで助けていますか	-0.9	-0.3
16	友達と協力するのは楽しいと思いますか	-1.3	-3
40	あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか	-0.5	-0.2
41	学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか	-0.5	-0.2

○ 学級づくりに関するアンケート調査結果（教員経験1年目から10年目の教員4,658名）

【大切にしていること】

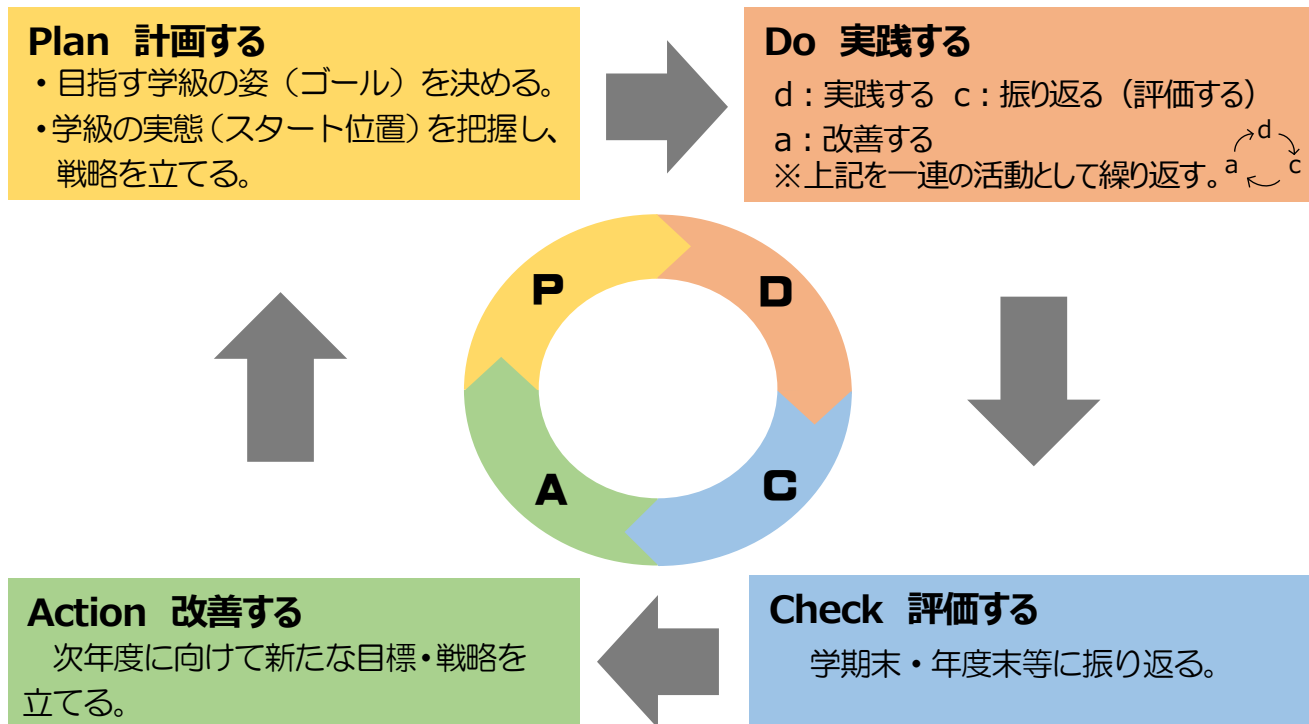
- ・児童生徒の声に耳を傾け、信頼関係を築く。
- ・互いに認め合える雰囲気をつくる。
- ・自分たちで考えて行動できるようにする。

【困っていること】

- ・児童生徒理解の仕方がわからない。
- ・けんか、人間関係のトラブルが絶えない。
- ・言われたこと、指示されたことはできるけど…

Ⅱ 学級づくりの進め方

1 PDCAサイクルで学級づくりをする



（１）Plan：計画を立てよう

💡 目指す学級の姿を明らかにする

学級担任として、「どんな学級をつくりたいか」「どんな児童生徒を育てたいか」等をはっきりとイメージしましょう。その際、学校教育目標や校長の学校経営方針に基づき、学級目標として具現化していくことが大切です。

💡 児童生徒、学級の実態を知る

実態を知る方法として、主観的な見取りと客観的な見取りがあります。主観的な見取りは児童生徒と共に活動する中で、教師自身が児童生徒の現状を知ることです。客観的な見取りは、学級集団尺度ツールや、他の教師の視点で情報を入れたり、家庭との連携を図ったりすることです。これらの二つの方法を併用しながら多面的に児童生徒や学級の実態を把握していくことが大切です。

💡 「プランニング」をする

学級づくりは意図的・計画的に進めていくものです。そのためには、見通しをもつことが大切です。現状を理想に近づけるためにはどうすればよいかを考える、その指導の手立てが「プランニング」です。目指すゴールを決めたら、その思いを実現するために、様々な「プランニング」をしましょう。

(2) Do：実践しよう

(do→check→action を一連の活動として繰り返す)

💡 do：実践する

計画に基づき、実践していきます。このとき、教師が大切にすべきことは、係活動等を児童生徒に任せっぱなしにするのではなく、声をかけたり助言したり、常に児童生徒の活動に対し「見ているよ」というサインを送り続けることです。

また、児童生徒の活動に対して「ありがとう」という気持ちを持ち、認めていくことが、次の活動への意欲を引き起こすことにつながります。

💡 check：途中での振り返りを忘れずに

次に大事なことは、自分の活動を振り返る時間と場を保障することです。児童生徒には、計画したことが実践されているか、また、教師はその実践がゴールに向かっているか、という視点で活動を振り返ります。様々な取組（係活動、学級のイベント、席替え等）は、一見すると別々のもののように思われますが、目指すゴールは一緒であることを意識して指導することが大切です。

💡 action：新たな手立ての必要性があれば改善する

児童生徒の活動が順調にいったときは、その手立てを継続していきます。うまく機能していないときは、児童生徒と一緒に新たな手立てを考えます。

その際、教師が「こうすれば…」と手立てを示すのは簡単です。しかし、それでは児童生徒の主体性は育ちません。児童生徒が考える時間を保障し、児童生徒が決めたことをサポートする立場で支援する心のゆとりをもちたいものです。

(3) Check：評価する Action：改善する

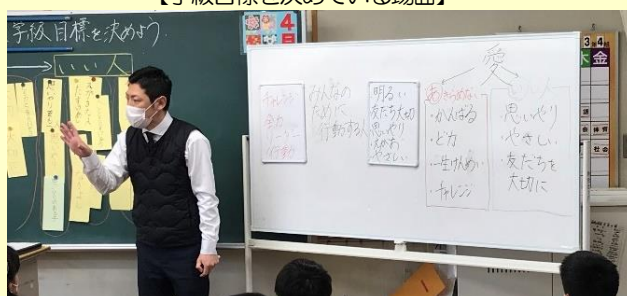
ここでの評価は、学期末あるいは年度末に自分の学級づくりを振り返り、これまでの実践の評価をします。そして、新たな計画を立て、次の学期または次の年度に実践していきます。

コラム

「教育観」をもってマネジメントする

めざす学級の姿を確立し、その実現に向けた「プランニング」をする際に大切なことは、自分の「教育観」（教育に対する見方・考え方）をしっかりともつことです。「教育観」をもつことで、判断基準が明確になり、ぶれずに指導・支援することができます。逆に、はっきりしていないと自信がなくなったり、ゴールを見失ったりしてしまいます。

常に自分の実践を振り返ったり、同僚教師や教育書から学んだりすることで、「教育観」を確立していくとともに、常に学び続ける姿勢が大切です。



2 学級づくりを進める上での留意点

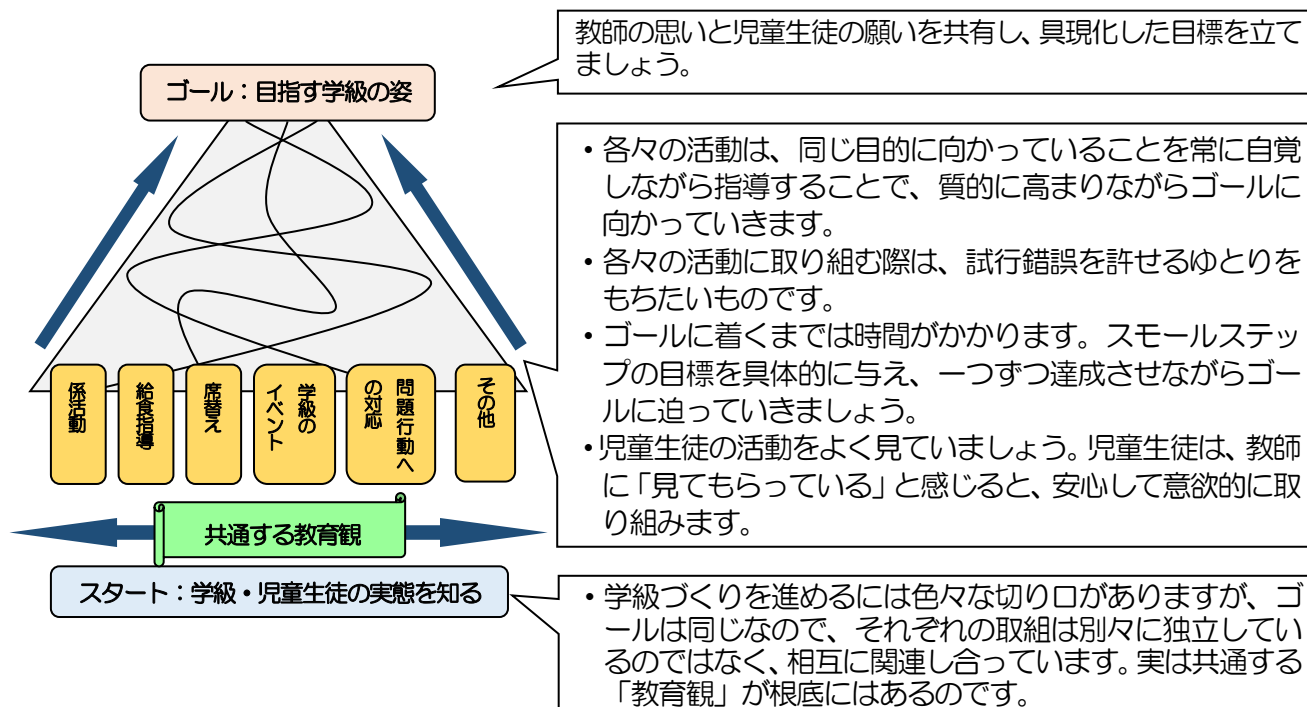
学級づくりは、基本的に一年間の計画で行います。教師は次の年に別の児童生徒と共に学級をつくることができますが、今受け持っている児童生徒にとっては二度とない一年です。だからこそ、実践、振り返り、改善を繰り返しながら、学級づくりを進めていく必要があります。児童生徒からの信頼を勝ち取るには時間がかかりますが、失うときはあっという間です。だからこそ、「何のために行うのか」「どのような児童生徒を育てたいのか」等、ぶれずに指導する必要があります。

このように、しっかりした自分の「教育観」に基づいて学級づくりを進めることで、次のような効果が期待されます。

コラム 教師が、「教育観」をもって指導すると…

- ・目指す学級や児童生徒の姿を常に考えているので、学級目標を意識するようになります。
- ・ゴールに向かうための、各々の計画、手立てが明確になるので、効率的に指導ができるようになります。
- ・指導における判断規準が明確になるので、ぶれることなく一貫した指導ができるようになります。
- ・教師の「教育観」が児童生徒にも反映されるようになります。教師が一人一人の児童生徒を尊重すれば、学級全体が一人一人を大切にする雰囲気生まれます。

【目指す学級を実現するために】



(1) 試行錯誤を認めるゆとりをもとう

児童生徒は活動する中で壁にぶつかりますが、この経験が児童生徒を育てることになります。教師が効率を優先するあまり、何でも用意し決定してしまうと成長しません。しっかりと、活動を振り返り試行錯誤させるゆとりをもちましょう。試行錯誤させる際は、できるだけ児童生徒の考えを尊重するとともに、教師は、児童生徒と共に考える立場で支援してい

くことが大切です。

また、児童生徒は失敗から多くのことを学びます。同じ失敗を繰り返さないように次の活動に向けて工夫するからこそ、成功体験を味わうことができます。そのため、失敗を受け止め、しっかりとフォローし支えていくことで「失敗から学ぶ」経験を大切にしていきたいものです。

(2) スモールステップで支援しよう

どんなによいプランがあっても、一気にゴールにたどり着くものではありません。児童生徒にとって達成しやすい、身近な目標をスモールステップで与えながら、ゴールを目指していきます。

その目標が達成できたら、新たな目標を与えそれに向かって活動する、という繰り返してゴールに近づくようにしていきます。

達成感 ・ 自信

次もがんばろう！
もっとやりたい！



めあて・目標

◀ 小さな一歩

◀ 小さな一歩

児童生徒にあったスモールステップで

(3) 粘り強く指導しよう

学級づくりは、長い道のりを一步一步歩いていくようなものです。そのため、焦らずに支援していきましょう。また、一度うまくいった方法が次に成功するとは限りません。しかし、「教育観」に基づいたゴールは変わりません。「これでいいや、もう十分」と安易に妥協せずに、粘り強く、常にこれでいいのかを振り返りながらゴールに向かってください。

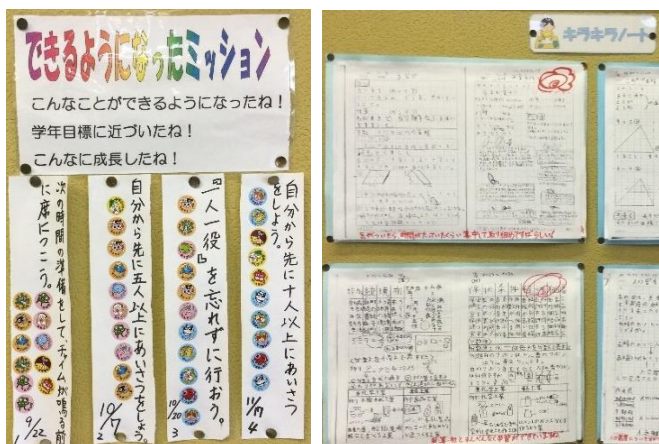
(4) 継続しよう

何事も続けることが大切です。また、どんなに素晴らしい計画を立てても、実践しなければ意味がありません。プランを立てることに労力を使い過ぎて、日常の見取りを怠ったり児童生徒任せにしたりしていると、活動は停滞しゴールを見失ってしまいます。

活動をマンネリ化させないために励まし、認めることで意欲が持続できるようにしていくことが大切です。さらに「これを重点的に取り組もう」「今どんな状況だろう」等、振り返りながら継続する必要があります。

そのためにも、日常的な見取りを継続していくことで、児童生徒を見取る目を養っていきましょう。

【めあての振り返り、自主学习ノートの掲示物】



Ⅲ 学級開き

生徒指導提要には、「学級づくりは、教師と児童生徒、児童生徒同士の選択できない出会いから始まる」と示されています。教師は、このような集団を、互いに尊重し、認め合い、励まし合える集団にしていく必要があります。そのため、学級集団としてのスタートを切る「学級開き」は非常に重要となります。学級の目指すべき姿を明確にしてゴールを示すことや、学級のルールを確認することで、学級としての素地を築くことが大切になります。ここでは、いくつかの例を紹介していきます。

1 児童生徒を迎える準備

これからスタートする一年間を、教師と児童生徒がお互いに気持ちよく過ごせるように、しっかりと準備をしましょう。新たな気持ちで前向きに学校生活を送ることができるようにしておきましょう。

(例えば…)

- 教室や廊下、下駄箱の清掃及び安全点検
- 掲示スペースの点検、児童生徒へのメッセージ等の掲示
- 机、いすの点検及び高さの調節
- 名前シール（番号）等の貼付

2 思いを伝える

教師の思いを、児童生徒に伝え共有することで、その方針が児童生徒にも反映されるようになります。その際、プレゼンテーション等で情報を視覚化すると、より効果的に伝えることができます。また、学級のルール等を確認する際には、特別の教科道徳等と関連させることで、より効果的に規範意識を高めることができます。



3 ルールの確認をする

ここで確認するルールというのは、二つあります。

まず一つ目は、児童生徒の安全や命に関わることなど生活に関するルールです。例えば、登下校の仕方や廊下・階段等の歩き方、学級における休み時間の過ごし方や掃除の仕方等があります。確認する際には、ただ「しっかりと守ってください」ではなく、なぜルールがあるのか、なぜ大切なのか理由を児童生徒と共に考えることで、ルールを尊重する姿勢を育むことが大切です。学級開きにおいて、しっかりと確認することで児童生徒が見通しをもって、意識を高めていくことができるよう支援していきましょう。

二つ目は、児童生徒が主体的に考え、行動してもよい範囲のことです。いわゆる、学級独自のルールになります。こちらについては、以下の点に留意することが大切です。

- ・ある程度の幅をもったルールの設定になっている。
- ・ルールの中では、自由に活動できるようになっている。
- ・ルールの中で自由に活動させることにより、児童生徒同士の相互作用を活発化させ、そこで相互に学ぶ中から気づき、学びを生み出すことがイメージされている。

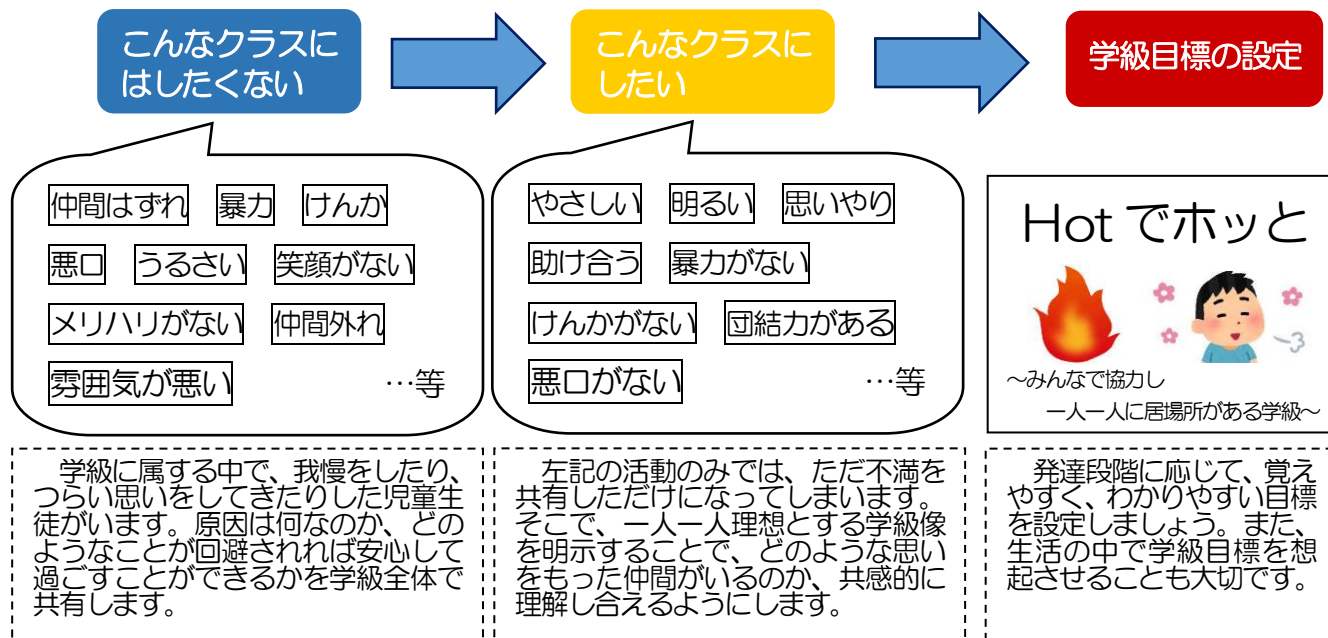
教師主導の学級づくりは、ルールの幅が狭く児童生徒によっては息苦しさを感じる場合があります。その息苦しさから、「不適切な行動」や「不登校」につながることもあります。一方、ルールの幅が広すぎると、児童生徒は何を基準にしたらよいのか、何を目指したらよいのか混乱してしまいます。そのため、児童生徒の発達段階や実態に合ったルールを設定し確認していくとともに、教師の押し付けにならないよう議論しながら決めていくことが大切です。

4 学級目標を決める

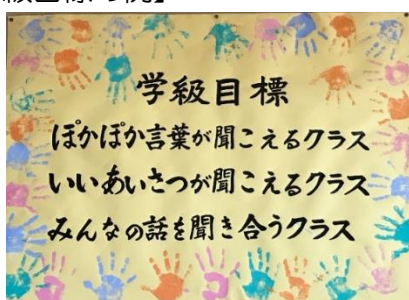
学級目標は、学級としての目指す姿です。そのため、設定する際には、教師が一方的に決めるのではなく、学級全体で話し合っで決めることで、児童生徒が自分事として捉え目標に対する意識が高まります。また、思考ツール等の手法を活用して、思考を可視化、分類・構造化することで多面的・多角的に考えることができます。



【決め方の例】



【学級目標の例】



Ⅳ 教師と児童生徒の信頼関係

1 教師としてのふるまい

言葉遣い

- ・「～です」「～さん」などの丁寧な言葉遣いをします。
- ・時と場に応じた適切な言葉遣いや声量に気を付けます。

身だしなみ、身の回りを整える

- ・清潔感のある服装、頭髮、身だしなみを心がけます。
- ・場や目的に合わせた、服装を心がけます。
- ・机上整理、身のまわりの整理整頓に気を配ります。

時間を守る

- ・授業では、はじめと、終わりのチャイムを、しっかりと守ります。



あいさつをする

- ・誰に対しても、積極的に、さわやかなあいさつをします。

分かりやすく指示する(ワンセンテンス・ワンメッセージ)

- ・指示は、短く簡潔に伝えます。一文で一つの指示を出すように心がけます。
- ・複数の指示をするときは、「また」「次に」や「一つ目は…」「二つ目は…」など、順序立てて伝えます。

2 自己開示

自己開示とは自分を知ってもらうことです。その中には自分の弱い部分も含まれるので、信頼できる相手でないと打ち明けられない傾向があります。相手からすると、信頼してくれているからそのような内容を話してくれたと感じるので、自己開示された相手は自分も自己開示をしやすくなり、人間関係が深まります。

【 自己開示の例 】

- ◇「それは私も分からないから、次の授業までに調べておきます。」
- ◇「そのことについて私は～だと思います。」
- ◇「私も小学生の時、今の〇〇さんと同じような失敗をしたことがあります。それは～」

3 率先垂範

児童生徒に身に付けてほしいふるまいや行動は、まず教師自身が率先してやって見せ、児童生徒のよい手本となりましょう。教師が思っている以上に、児童生徒は教師のふるまいを見て育っていきます。よい手本を見せてあげることで、教師への信頼も増して、児童生徒との人間関係も良好となっていくことでしょう。

4 児童生徒理解

学習指導要領解説「総則編」には、「学級（ホームルーム）経営を行う上で、最も重要なことは学級の児童（生徒）一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな児童生徒理解である」と示されています。

信頼関係の第一歩は、相手のことを理解することです。そのためには、授業中だけでなく、休み時間や給食の時間などにも、積極的にかかわることが大切です。ここでは、児童生徒理解の具体的な手立ての例について、いくつか紹介していきます。



（１）ICT（Forms）を活用した学級アンケート

アンケートを活用することで、直接言えない悩みを相談するといったケースがあります。ICTを活用すれば、集計等の手間が省け効果的に取りまとめることができます。また、一度作成すれば、定期的にくり返し実施することもできます。

学級アンケート

このアンケートは、先生以外が見ることはありません。困っていること、悩んでいることがあったら、正直に書いてください。

1 学級の友達、あなたに優しくしてくれますか。

☐ 大変そう思う

☐ 概ねそう思う

☐ あまりそう思わない

☐ 全くそう思わない

（２）正対する

「子供」としてではなく、一人の「人」として児童生徒と向き合うことで、より深い信頼関係を築くことができます。さらに、児童生徒の話を聞く際には、相手を受容し、共感的な雰囲気をもって傾聴することで、安心感を与えることが大切です。



（３）特別な配慮や支援を要する児童生徒への対応

社会の急激な変化とともに、児童生徒の発達上の多様性や家庭環境複雑化等、様々な支援を必要とする児童生徒が増えています。そのため、個々のニーズに応じたきめ細かな対応が必要です。その際には、連携して指導・支援していくことが大切です。

例として、連絡事項や一日の流れを教室黒板やホワイトボードに残しておく方法があります。口頭で指示する場合がありますが、重要なことは連絡事項を教室に一日残しておくことで、話を聞くことが苦手、多くの情報を覚えきれない児童生徒にとっても再度確認することができ、見通しをもって過ごすことができます。

	やりとり帳見ます!! 出てね	連絡
1	技術 教科書ワーク 3/5	
2	技術	
3	国語 教科書ノートワーク 5	6/30
4	音楽 理→音 Pのり 82	6/28
5	英語 ENGLISH SET 5	
6	学級 学習部発表→コース決め① 5	

5 凡事徹底

「凡事徹底」とは、ルールを守ることはもちろん、身の回りの整理整頓、学習中の姿勢、清掃活動など当たり前と思われることを大切にしていくことです。これは、教師にも通じます。自分自身も当たり前のことができるよう凡事徹底を心がけましょう。「なんで、できないの？」ではなく、「がんばっているね」とできるようになったことを認めながら、長い目で継続して指導・支援をしていきましょう。そういった教師の姿勢、こだわりこそが学級の習慣となります。



【正しい姿勢で話を聞いている様子】



【整頓されたロッカー】

6 感謝の気持ちを伝える

私たち教師は、児童生徒を毎日見っていますが、本当に見なくてはいけないのは、一人一人のよいところや努力しているところです。そして、「見ていること」を児童生徒に伝える必要があります。下のような言葉かけから児童生徒の自己肯定感は育っていきます。また、児童生徒がしてくれたことには感謝の気持ちを伝えることが大切です。たとえそれが当番の子であったとしても「ありがとう」の気持ちを伝えましょう。そうすることで「私はクラスのために役立っている」という自己有用感を育てることができるのです。

【「見ていること」を伝えている例】

- ◇ノートの字がきれいだったら → 「きれいな字で書いているね。」
- ◇友だちに親切にしていたら → 「〇〇さんのそういうところ、すごくいいなあ。」
- ◇まじめに勉強したのにテストの点が悪かったら → 「でも、まじめに努力していたじゃない。」

【感謝の気持ちを伝えている例】

- ◇給食の後始末をした子に → 「給食の後始末をしてくれてありがとう。」
- ◇黒板係の子に → 「〇〇さんのおかげで黒板はいつもきれいだね。とても書きやすいよ。」

7 コーチング

コーチングとは、目標実現、問題解決のために、自発性を促し、行動を引き出すコミュニケーションです。一方、ティーチングとは答えを与えるものなので、その答え以上のものは出てきませんし、その答えが適したものではない可能性もあります。何より、ティーチングばかりだと、児童生徒は答えを待つようになり、失敗したときは自分で責任をとらなくなってしまいます。

コーチングは児童生徒の可能性を信じて、自分で自分の中から答えを引き出すことができるようにサポートします。その結果、自分ができそうな方法を、自分で考えるようになります。それがうまくいったときには、「私もやればできる」という自己効力感をもつことができます。

【ティーチングとコーチングのちがい】（T：教師 C：児童生徒）

ティーチング	コーチング
T：課題を、まだ提出していませんよね。 C：すみません。終わっていません。 T：どうしてですか？一週間も前に出してありましたよね？ C：はい…土、日曜日は部活の試合があったりして…。 T：それでも、みんな提出していますよ。あなたに、やる気がないからじゃないですか？ C：すみません…。 T：明日の朝までには提出してくださいね。 C：はい…。	T：〇〇さんの課題が見あたらないんですけど…。 C：すみません。まだ終わってなくて、出せませんでした。 T：まだ終わってなかったんですね。そういえば、土、日曜日は試合があったんですね。 C：はい、それもあつたんですけど…。 T：それだけじゃないんですか？ C：はい、他の教科の課題もあつて…。 T：忙しかったんですね。一週間では無理でしたか？ C：いいえ、僕の見通しが甘かったです。明日の朝までに提出します。

8 I メッセージ

学校生活において認めたり励ましたりする等、教師が児童生徒に言葉をかける場面は数多くあります。その際、言葉遣いに気を付けることはもちろんですが、伝え方を工夫することで相手が受け入れやすい伝え方があります。それが「Iメッセージ」です。

「Iメッセージ」は、「私（I）」を主語にして、「相手の行動」「その影響」「自分の気持ち」で構成されている話し方です。「私」を主語にしているため、相手に配慮しながら、自分の主張を伝えることができます。そのため、相手にとっても受け入れやすく信頼関係が成立しやすいといわれています。

【「Youメッセージ」と「Iメッセージ」の例】

◇「Youメッセージ」

「なぜ考えて行動できないんですか！ これでは、時間の無駄です！」

◇「Iメッセージ」

「みなさんが考えて行動してくれると、時間を効率的に使うことができて、

私はうれしいんだけどな。」

コラム

傾聴 ～心と目と耳を十分に傾けて～

自分から話しかけることと同じように大切なのは、温かい心で児童生徒の話に耳を傾けて聴くことです。これを「傾聴」と言います。「傾聴」で何より大切なことは、相手を尊重してじっくりと話を聴くことです。児童生徒が話しかけてきたら、今やっていることをいったん止めて、児童生徒の話に耳を傾けましょう。途中で疑問や批判をはさまずに最後まで聴きます。

また、授業中、児童生徒の発言が教師の意図したものではなかったとしても、流してしまうことなく最後まで聴き、「〇〇さんは～と考えているんだね」と確認しながら進めることが必要です。相手を「受容」し、「共感的な理解」に努める姿勢が信頼関係を生むのです。教師が受容的で共感的な雰囲気をもっていると、児童生徒同士の関係も落ち着いてきます。



V 児童生徒同士の人間関係

1 集団を育てるとは「つながり」をつくること

「個を育てる」とことと同時進行で「集団を育てる」ことが、学級づくりでは大切になります。児童生徒は、集団の中にいるからこそ、個性が明確になり、役割が与えられます。個性を伸ばし、役割を果たすことで、「個」の力を育みます。集団があるからこそ「個」が成長するのです。「集団を育てる」ということは、児童生徒の個性を大切にしながら、一人一人を丁寧につないでいくことです。

これからの社会を担うためには、「多様な他者と相互理解をし、対話を通し、対立を乗り越え、誰もが納得できる合意形成をする力」が必要だと考えます。そのために「人間は一人一人がみんな違う」という当たり前のことを教師は折に触れて話をする必要があります。同時に、「みんな協力することは簡単なことではない」ことを教師が自覚し、対話となる「しかけ」をつくるのが大切です。そうすることで、児童生徒は活動を通して互いを認め合い、自分の居場所を見つけ、力を発揮できるようになります。では、「安心できる居場所づくり」をどのように行えばよいのでしょうか。この章では、そのしかけ方や、目的について述べていきます。

2 人間関係を築く場面



(1) 構成的グループエンカウンター

構成的グループエンカウンターとは、集団を対象とした開発的なカウンセリングです。本音と本音のふれあいを通して、集団内にリレーション（お互いに相手を尊重しながら感情交流ができる関係）をつくることと、自己発見する（これまで気付かなかった、あるいは気付いていても表現できなかった自分をオープンにしていく）ことをねらいとしています。

構成的グループエンカウンターは、次の順序で実施します。たくさんのエクササイズの中から、ねらいや学級の実態に合ったものを選ぶ必要があります。最後のシェアリングは、基本的に4人のグループで行います。個々の感想を周囲が否定せずに聴くことで、お互いを尊重する経験をすることができます。これを行うことで単なる「ゲーム」で終わることがなくなります。

このように、互いの思いや考えを肯定的に聴くことを「聴き合い活動」と言います。この「聴き合い活動」は他にも、一つの正解を求めず、児童生徒の感じ方を尊重するような学習の場面で取り入れることができます。

構成的グループエンカウンターを実施する際には、教師が「学級の実態が△△だから、このエクササイズを実施して、〇〇の状態になってもらいたい」という意図をもって、計画的・継続的に行うことが大切です。また、シェアリングの場面では、児童生徒が慣れるまで、教師が積極的に介入して進めるようにしましょう。



コラム 構成的グループエンカウターの進め方

①インストラクション

教師が、これから行うエクササイズの目的、やり方、ルールなどを説明します。

②ウォーミング・アップ

エクササイズに入りやすくするために、簡単なゲームを行います。

③エクササイズ

心理的側面の発達を促すための課題を行います。

ねらいとエクササイズの例は以下のとおりです。

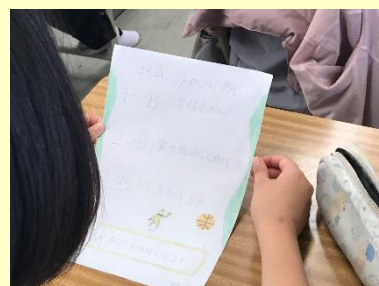
- ◇自己理解・他者理解 : 「いいところさがし」「私は私よ」
- ◇自己受容 : 「自分への手紙」「いいところ川柳大会」
- ◇自己主張 : 「○かな×かな」「私の話を聞いて」
- ◇感受性の促進 : 「イメージの小旅行」「別れの花束」
- ◇信頼体験 : 「ゴリオリゲーム」「トラストウォーク」

④シェアリング

エクササイズにより気付いたり、感じたりしたことを
本音で伝え合い、分かち合います。気づきや感情を
明確化し、ねらいを定着させます。



【クラスの仲間の「いいところさがし」を
クイズ形式にした場面】



【最後は仲間が書いた「いいところ
リスト」を本人にプレゼント】

(2) 行事

行事は、児童生徒一人一人を育て、人間関係を築く絶好のチャンスです。一つの目標や目的に向かってみんなで協力したり、時には葛藤したりする体験は、自分の意見を主張するばかりではなく、相手を尊重したり、折り合いをつけたりすることを通して、人間関係を築く力を育みます。

仲間と協力して作り上げた行事は、達成感などの感動体験を生むと同時に、学級というチームワークを育てることができます。

教師は、一つ一つの行事で児童生徒につけたい力を明確にし、児童生徒が主体的に取り組めるように支援することが必要です。



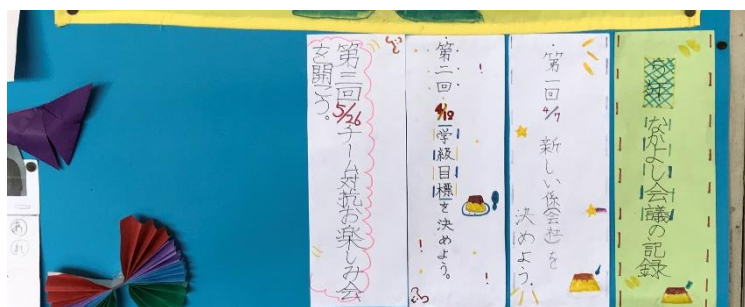
(3) クラス会議による話し合い活動

クラス会議とは、児童生徒で学級の課題について、解決策を考え話し合っていくものです。継続的に実施していくことで、児童生徒の安心感を高めるとともに、学級への所属感、仲間への信頼感、課題解決への貢献感といった、共同体感覚を育むことができます。

議題については、児童生徒から吸い上げるなどして、話し合うことに必要性を感じるものにすることが大切です。そうすることで、児童生徒は自分事として、主体的に話し合いに参加することができます。



【コの字型のクラス会議（ICT も利用）】



【クラス会議の記録】



【円になって距離を縮めてのクラス会議】

コラム 多数決で気を付けること

多数決は少数意見を切り捨ててしまうことに問題があります。少数意見だからといって、その意見が間違っていたり、価値がなかったりするわけではありません。誰一人取り残さない社会の担い手を育成する上では、「全員が合意」できる話し合いを目指すことが大切です。

例として、学級レクレーションを決める場面で「ドッジボール」と「バスケットボール」の二つ提案があったとします。そして、多数決をとれば「ドッジボール」になるような場面を想定します。そのときに、「ドッジボールに反対」という意見の理由が「ボールに当たると痛い」というものであれば、「柔らかいボールにする」など、新たな意見を皆で見つけ出し、合意を目指す対話を重ねていくことが目指す姿と言えます。

特に学校行事などでは、決めなければならないことが多くありますが、期限内に決めることが目的化しないよう気を付けなければなりません。意見を十分に出し合うことで、それぞれのよさと心配な点を皆で理解し、全員の納得解を得られる活動を目指すことが大切です。

反対に、全員にとって「どの意見でもよい」のであれば、多数決でよいことになります。



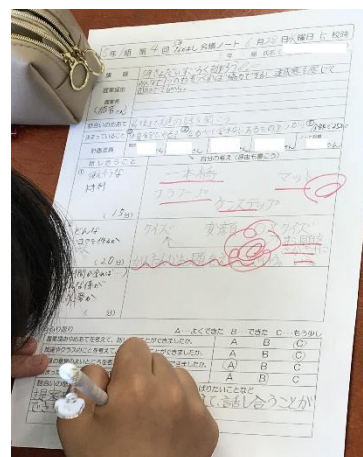
(4) 授業

学級の児童生徒全員が、最も長い時間一緒にいるのが授業です。集団で学ぶという特性を生かして、互いに認め合い、協力し合うことの大切さを感じさせることが大切です。そうすることで共感的な人間関係を育てることができます。

●失敗や試行錯誤が許される雰囲気を

「授業中に自分の考えを発表したけれど、間違っていて友達に笑われた」という経験をしたら、その子は発表することが嫌になり、誰かが正しい答えを教えてくれるまで待つようになってしまいます。

教師は正しい答えだけを評価するのではなく、自分で考えたことや頑張ったこと、自分の考えを発表したことのよさを認めて、温かい言葉をかけてあげることが必要です。そして、誰でも間違えることがあることを児童生徒に伝えます。そうすることで、失敗や試行錯誤が許される雰囲気ができ、学級は児童生徒にとって、安全な居場所となります。



個別の評価により、自分の意見に自信をもって発表することができます。

●一人一人が活躍できる授業を

一人一人が大切にされ、それぞれが活躍できるような授業を行うことで、児童生徒は互いに認め合うようになります。そのためには児童生徒の学習状況や特性を理解し、どの場面でどの子が活躍できそうか、考えておく必要があります。

また授業中には、個別支援の時間を取り、その子に応じた支援を行ったり、認めたりすること、一人一人の考えを出し合う場を設定し、丁寧に対応することなども大切です。

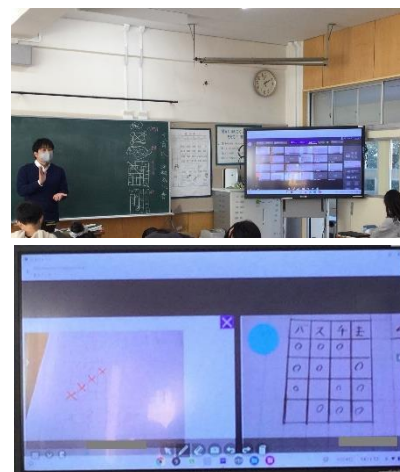


児童生徒それぞれ活躍の場面をつくることで、互いを認め合う関係を育みます。

●互いが認め合える授業を

児童生徒が授業で認め合うようになるためには、まず、教師が児童生徒に温かい言葉をかけることが必要です。授業中に「今の〇〇さんの考えはどうですか？」と問いかけることや、友達の意見を聞いてうなずいている子を認めるなど、児童生徒同士が評価し合う場面を積極的につくるのが効果的です。

その他にも、グループごとに課題に取り組む活動や、話し合いによってお互いに歩み寄る経験をする 것도大切です。

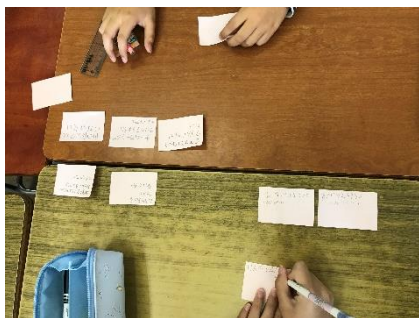


ICT を使うことで、簡単に互いの考え方を比べ合い、評価し合うことができます。

3 ブレインストーミングからのKJ法

(1) ブレインストーミング

複数人で行う話し合いの手法になります。活用することによって、参加者がそれぞれ自由にアイデアを出したり、参加者同士で新しい発見に気づき合ったりすることができます。まずは、個人が付箋に意見を記入し、模造紙やホワイトボードに貼り付けていきます。ルールが批判厳禁（意見をまとめない）のため、誰かが主導権を握ることなく、全員が平等に意見を言い合うことができます。



ルール

- ①批判厳禁
（意見をまとめない）
- ②自由に書く
- ③質より量
- ④相乗り、付け足しOK



(2) KJ法

関係性のある付箋を近くに寄せグループ化し、小見出しをつけます。その後、グループごとの関係性なども記入し、全体を構造化します。



【話し合いながらグループに分けていく様子】



このような話し合いを繰り返し設定することで、児童生徒がその他の活動でも自信をもって意見を述べたり、質問したりできるようになります。また、他者の意見を尊重した付け足しもできるようになります。大切なことは、ブレインストーミングのルールを折に触れて児童生徒に説明し、意見の言いやすい雰囲気、人間関係を構築することです。

※ その他の思考ツールについては、千葉県総合教育センターHP からダウンロードできる「思考スキルに応じた思考ツールの活用」リーフレットを参照してください。

【KJ法：文化人類学者の川喜田二郎】

4 アサーション

アサーションとは、「自尊の自己表現」という意味です。自分の意見や気持ちをきちんと「伝える」と同時に、相手の話も十分「聴く」ことなので、互いを尊重する人間関係を育むことができます。簡単に言えば、「相手の意見・言い分をいったん受け入れてから、自分の言いたいことを伝える」ということです。このことによって対立が生まれにくくなるため、人間関係が良好になりやすくなります。

アサーティブな表現方法

自己表現の方法は大きく分けて三つあります。アサーション・トレーニングでは③の自己表現が身に付くことをねらいとしています。

①アグレッシブ(いばりやさん)

→自分のことを優先し、他者を無視・軽視する自己表現

②ノン・アサーティブ(おどおどさん)

→自分よりも他者を優先し、自分のことを後回しにする自己表現

③アサーティブ(さわやかさん)

→自分のことをまず考えるが、他者のことも十分配慮する自己表現

具体的な例を以下の場面を使って説明します。

あなたは友だちの A さんと、お昼ご飯を食べようとしています。
A さんは「イタリアンのお店に行こう」と言いましたが、あなたは昨夜もイタリアンを食べているので、他のお店がよいと思っています。

①アグレッシブな表現

「いやだよ。他のものが食べたいんだから！」



②ノン・アサーティブな表現

「えっ！ そう、イタリアンがいいんだ…」

うーん… じゃ、イタリアンにしようか…」



③アサーティブな表現

「イタリアン、私大好き！おいしいよね！でもごめんね。

私、昨夜もイタリアンだったの。この近くにおいしい

和食のお店があるんだけど、よかつたらそこにしない？」



相手の意見・言い分をいったん受け入れてから、自分の言いたいことを伝えます。

5 ピア・サポート

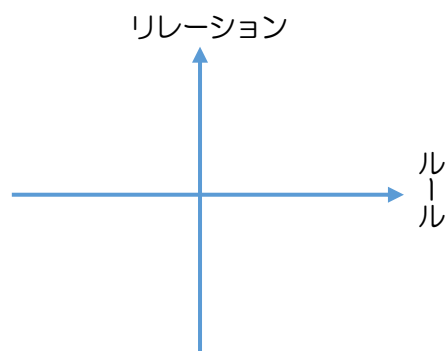
ピア・サポートとは、児童生徒が互いに支え合い、助け合うような関係をもつことです。仲間を支援する体験を通して自分を見つめ直すことで自己成長にもつながり、思いやりあふれる学級ができるようになります。

※ 千葉県では「豊かな人間関係づくり実践プログラム」として、小学校1年生から中学校3年生まで、体系化されたプログラムが用意しています。「周りの人を大切にするスキル」と「自分を大切にするスキル」を各学年で学べるようになっていきます。ただし、これは「教育モデルに基づくピア・サポート」であり、「カウンセリングの考え方に基づくピア・サポート」とは異なります。



6 学級の状況を把握する

児童生徒一人一人を育てるためには、一人一人を理解することが必要のように、学級集団を育てるためには、その学級集団の状態を理解することが必要です。児童生徒の心理面が変化してきている今日、心理テストなどは、学級集団の状況をより客観的で適切に把握するための一つの方法と考えてもよいでしょう。



児童生徒の関係性は日によって変わります。年度初めは仲がよかったから、今もきっと仲がよいだろうと単純に捉えるのではなく、休み時間や登下校、授業の中でどのようなつながりをもっているか、常に現状を捉え直すことが大切です。

7 教師が模範となる

児童生徒は、教師の立ちふるまいに感化され、よりよい生き方を学んでいきます。むしろ言葉で指導するよりも姿勢を示すことの方が効果的です。そのために、まずは教師自身が人間関係づくりの模範となる必要があります。

(1) 教師と児童生徒は人として対等である

「人として対等である」とは、「互いに尊重し合う」ということです。人生経験の差はありますが、教師も児童生徒も対等な人間であることを肝に銘じることが必要です。時に、児童生徒は沢山の失敗をします。その失敗を受け止め、励まし勇気付けることこそが教師のやるべきことです。教師が児童生徒を一人の人間として尊重すれば、「尊重とは何か」を児童生徒は実感しながら学んでいきます。

(2)「信用」ではなく「信頼」

「信用」と「信頼」は異なります。「信用」というのは、信用するための根拠が必要になりますが、「信頼」に根拠は必要ありません。教師は、児童生徒を「君が何をしようと、どんな失敗をしようと、私はあなたを信頼している」という温かい視線で見ることが大切になります。

児童生徒にとって、教師が「信頼」してくれているという視線は、大いに勇気付けられ、高いパフォーマンス力を発揮することができます。

教師が児童生徒を「信頼」することができれば、児童生徒もまた「信頼とは何か」を実感しながら学んでいきます。人間関係づくりの入口として、「信頼」という人の見方を大切にしたいものです。

8 「つながる」「貢献する」「自信をもつ」のサイクル

人は、人とのつながりの中で自分の居場所を確立していきます。そして人とつながることで、他者への関心は大きくなり、貢献する機会にも恵まれます。さらには貢献することで得られる達成感や、他人からの承認によって自信をもち、さらに人とつながろうとします。

最初は家族といった身内から始まり、親しい仲間、学級、そして社会へとつながりは大きく広がっていきます。こういった経験を積むきっかけを提供することが、教師の役割と言えます。



VI 主体的に活動できる学級

1 学級づくりに欠かせない話し合い活動

特別活動をととして、学級づくりをしていくことが大切です。特に、話し合い活動はその中心となります。学習指導要領解説「特別活動編」の、特別活動の目標にも「集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。」と記載されていることから、その重要性はとても高いことがわかります。充実した話し合い活動を行い、学級づくりに生かしましょう。

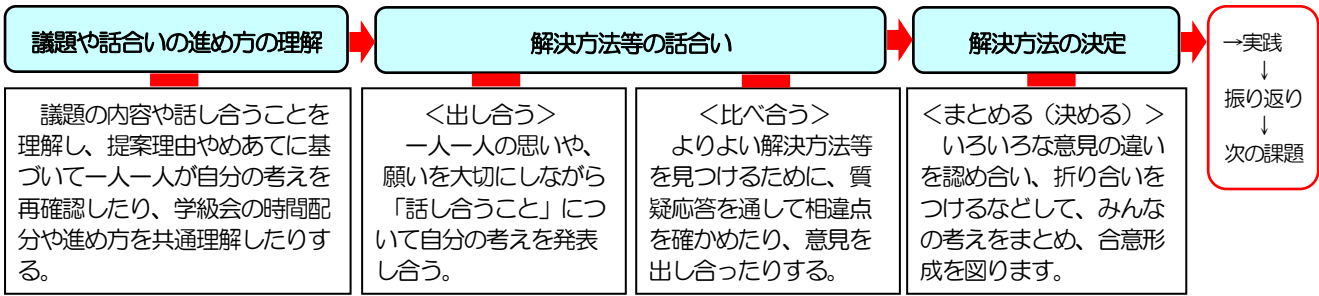
(1) 話し合い活動の事前準備

①問題の発見→②議題の選定→③議題の決定→④学級会の計画と準備

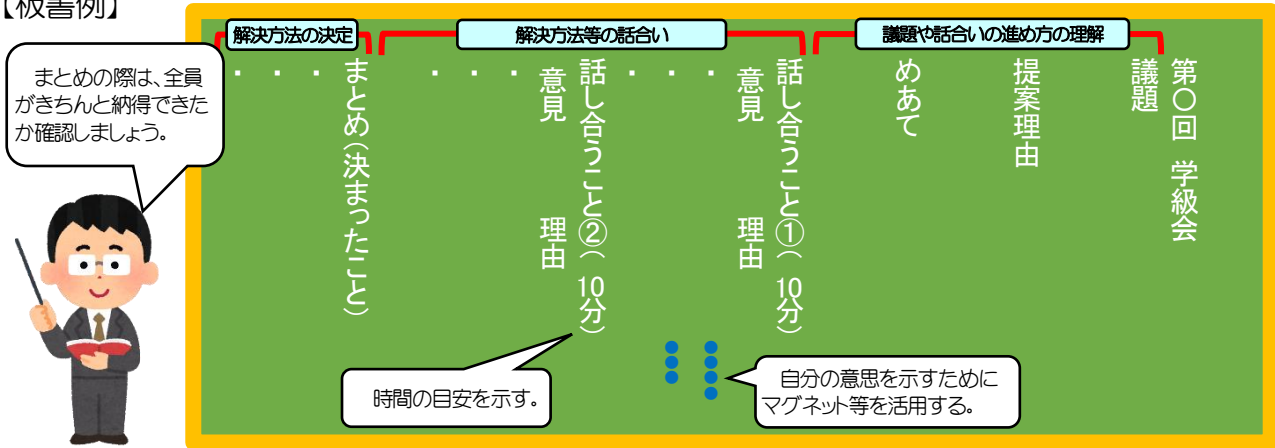
※ 議題の選定や決定は、児童生徒の代表、学級全員、教師等、発達段階や学級の実態に応じて行いましょう。

＜議題の集め方＞ ・議題ポストから ・朝の会や帰りの会での話題から ・学級日誌に書かれていることから ・係活動や当番活動の感想から ・児童会や生徒会から依頼されたこと、または学級から児童会や生徒会に提案したいことから ・これまでの活動の振り返りから ※学級経営方針に基づいて教師が示すことも考えられます。	＜具体的な計画や準備について＞ ・議題の提案理由を明確にしましょう。 ◇現状の問題点 ◇考えられる解決方法 ◇解決後のイメージ 等 ・話し合うことを決めましょう。 ◇何をするのか ◇どのようにするのか ◇役割分担は 等 ・話し合いのめあてを決めましょう。 ◇提案に対するゴール ◇話し合いの仕方 等 ・話し合いの役割をし、進め方や気を付けることを確認しておきます。 ◇司会 ◇記録 ◇話し合いの形式 ◇話し合いのルール 等 ・決まっていることを確認します。 ◇日時や場所 ◇レク大会等で行うゲームの数 等
---	---

（２）話し合い活動の進行



【板書例】



(3) 話し合い活動の形態

●シンク・ペア・シェア

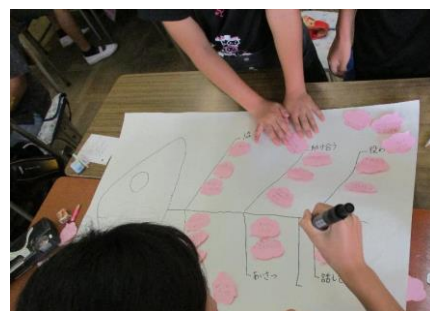
シンク（個人）、ペア（小グループ）、シェア（学級全体）の段階を追って進めていくシンプルな話し合いの形です。まずは、自分の意見をもつ時間を確保しましょう。その次に、小グループで共有したり共感したりして意見をまとめていきます。最後に、学級全体で議題の解決方法を見つけていきます。メリットとして、個人の意見を表現する場がきちんと確保できることです。留意点は、互いの意見を尊重し合うことです。「議題の解決についてよりよい方法を見つけていく」という視点からずれないようにしましょう。



この形はいろいろな場面で活用できます。普段の授業でも取り入れましょう。

●思考ツールを使った話し合い

思考ツールは、学級での課題解決や学校行事に向けて等の話し合い活動で活躍します。意見をまとめたり、課題を整理したりするときは「フィッシュボーン」や「ベン図」等、アイデアを出し合うときには「カードブレインストーミング法」や「マンドラ」等を活用すると効果的です。思考ツールを活用することで、児童生徒同士が協働して考え、話し合いながら課題解決に向かっていくことができます。



思考ツールを、取り扱う議題によって使い分けましょう。

その他の思考ツールについては、千葉県総合教育センターHPからダウンロードできる「思考スキルに応じた思考ツールの活用」リーフレットを参照してください。



椅子や机の配置を工夫して、学級全体が見えるようにすると、個々の表情を見ながら話し合い活動が進みます。



電子黒板を使って、進行の手順やあらかじめ集約した意見を表示しながら行くと、見通しがもて効果的です。



一人一台端末を有効に活用して、意見の共有やまとめを行うことも話し合い活動に取り入れてみてはいかがでしょうか。

(4) 話し合い活動に活用できるICT ツール

●デジタルホワイトボード（Google Jamboard 等）

ネット上の付箋を使って意見を出し合い、話し合いを進めることができます。グループでまとめたり、学級全体で共有したりできます。

●チャット機能が使えるツール（Microsoft Teams 等）

対面だとなかなか発言できない児童生徒でも、チャット上では発言することが期待できます。ファイルの共有やホワイトボード機能等もあります。

●クラウド型授業支援ツール（ロイロノート等）

プレゼンテーション型の話し合い活動をするときに活躍します。提出箱、シンキングツール、アンケートカード等、充実した機能があり、充実した話し合い活動が期待されます。

●キーワードを抽出するツール（テキストマイニング等）

議題の中心となるキーワード等を吸い上げることができ、話し合いの視点が明確化されます。学級目標や運動会のスローガン等を決めるときに役立ちます。

2 係活動の充実

児童生徒の主体性を伸ばし、責任感をもたせていくために係活動は大切な取組です。係活動を充実させるために大切なことは、児童生徒が自ら考え、計画、実践していくことです。このことが他者への貢献となり、学級を豊かにしていきます。また、人に役立つ喜びを感じることで自己有用感を育むことにもつながります。

ところで、当番活動と係活動の違いはなんでしょうか。当番活動は、学級の生活を円滑に運営するために、それぞれの仕事を分担し、責任をもって行う自主的な活動です。係活動は、学級の生活をより豊かにしていこうと、児童生徒が創意工夫して行う主体的な活動です。発達段階や学級の実態を考慮しながら、この二つの活動の違いを意識して設定できるようにすると、よりよい学級づくりができます。

(1) 主体的に考えて取り組む係活動の例

【実践例①「視点を与えて」】

教師側から係活動を考える視点を一つ与え、その後は学級会等を通して児童生徒同士で決定していきます。例えば「学級が楽しくなる係活動」とします。すると、児童生徒は「どのような係があれば学級が楽しくなるのか」と考え、様々なアイデアが生まれます。「季節を感じさせる係活動」「あると便利な係活動」等の視点も考えられます。

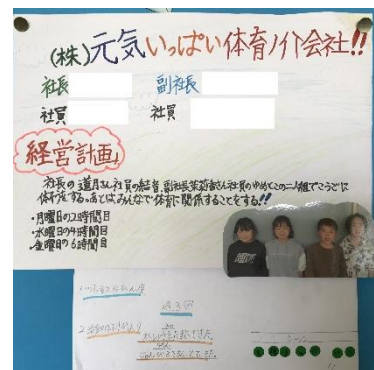
視点の設定から児童生徒が考えるのもよいのではないのでしょうか。



児童生徒のアイデアを尊重することで、継続的な活動が期待できます。

【実践例②「〇〇係を〇〇会社」に】

係活動を「〇〇会社」とし会社形式で活動します。会社は、社長と副社長（2名以上の構成員）と活動内容と期間が決まっていれば、申請をして設立することができます。会社を設立したら、求人募集を出し、他の児童生徒は、求人募集の活動内容を見ながら、興味・関心がある会社に入社し、それぞれの活動内容に沿って会社を運営していきます。学級会等で、定期的に「株主総会」としてそれぞれの会社を評価し、運営を見直していく工夫等があります。



活動内容等を立案することで計画的、主体的な活動になります。

コラム 〇〇係を〇〇同好会に

係活動を「〇〇同好会」にして活動する工夫もあります。

好きなことを同じ友達が集まって活動するので、主体的な取組が期待されます。それぞれの同好会が主催となって運営する集会活動があるとより効果的です。同好会の設定方法や人数等、あらかじめ話し合い活動を通して設定することで、スムーズな運営につながります。同好会なので、あまり形式的にならずに、それぞれの同好会のよさを生かした活動にできるようにしましょう。

〇〇会社や〇〇同好会等、係活動の呼び名を工夫するだけでも、学校での活動が楽しくなるかもしれませんね！



(2) 定期的にPDCA サイクルを

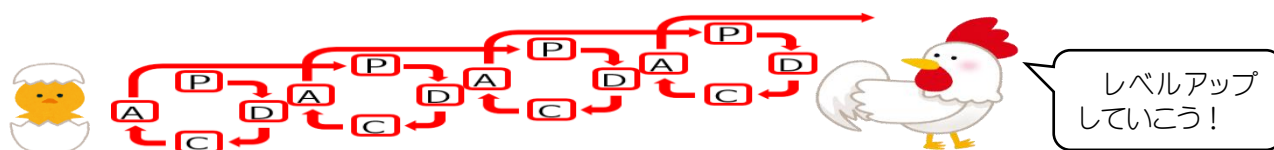
係活動を例に考えていきます。

係活動の振り返りを学期に1回ではなく、定期的に PDCA サイクルが回せるように計画することが大切です。定期的にサイクルを回すことが、児童生徒の主体的な活動につながります。

【3学期制での例】



それぞれのサイクルは単発で終わるのではなく、下の図にあるとおり、スパイラルとなって連動しながら、よりよい活動になるように意識していくとよいです。



特に、C（評価）からのA（改善）をしっかりとできるようにしましょう。そうすることで、既存の係活動の見直しをしたり、新たな係活動を生み出したりして、常によりよい活動を目指して取り組めるようにしてください。

3 自発的、自治的な活動

「自発的、自治的な活動」とは、児童生徒が自ら課題を見出し、その解決方法や実施について合意形成を図り、互いに協力しながら目的を達成していくものです。児童生徒の意見や考え、活動を尊重していくことはもちろんですが、教師がしっかりと関わり、適切に支援をしていく必要があります。総合的な学習の時間（探究の時間）や特別活動、行事等を活用し、横断的に取り組むことでより効果的な活動になります。

「自発的、自治的な活動」では、自分の意見はもちろん、友達のよいところを意識しながら、ペアや班、全体での話し合いを通して合意形成を図っていきます。その際に、一概に多数決で物事を決定するのではなく、児童生徒自身が折り合いをつけながら物事を決定していくことが大切になります。互いに協力し合いながら他者を理解することで、自発的、自治的な取組につながっていくよう配慮しましょう。また、児童生徒に丸投げするのではなく、場合によっては教師が適宜助言・修正をしていくことも必要です。そして、活動に対する評価、振り返りを行わせることで、自己有用感が育めるようにしてください。

●自発的、自治的な活動の例

【実践例①「掃除の仕方を見直すために」】

自分たちの掃除の仕方を見直す活動です。まずは、タブレット等の端末を活用して自分たちの掃除の様子を撮影します。その後、各分担場所で自分たちの掃除の様子を確認しながら、改善点を探していきます。映像を確認しながら各自が見直すことができるので、具体的な改善方法を考えることができます。より正確な実態を捉えるために、担任が事前に撮影しておくのも一つの方法です。



ICT 端末を活用することで、自分たちの実態を客観的に知ることができます。

【実践例②「集会活動の充実」】

学校行事としての集会活動ではなく、学級での集会活動です。開催時期や内容は児童生徒が考え、つくっていきます。役割ごとの連絡は、背面黑板等を使って事前に周知する等の工夫をすることで、当日の細かい説明を省くことができます。大切なことは、教師が児童生徒を信頼し任せることです。はじめは助言等がかかわることが多いですが、回数を重ねるごとに児童生徒の企画力や実行力等が身に付いていきます。授業時間を使って準備をさせる場合には、特別活動の年間計画や時数等に留意してください。



自分たちで企画したイベントがあると、学校が楽しくなります。

【実践例③「まとめとしてのスライドづくり」】

行事や様々な活動のまとめの一つとして行うスライドづくりです。模造紙等でまとめる新聞づくりの代わりに、プレゼンテーション用ソフト等を活用してまとめます。まとめたスライドは、授業参観で発表したり、下級生の児童生徒に当該学年の行事等を紹介したりする活動等に活用できます。ネットワークを介して作業を行えるようにすれば、グループの児童生徒が一度に作業ができ、効率化も図れます。なお、写真を使用する際は、映っている友達の承諾を得る等、配慮を忘れないようにしましょう。



個人作業ではなく、グループで協働して行えるようにしましょう。

【実践例④「学校が楽しくなる朝の会・帰りの会」】

時間がない中で行う朝の会や帰りの会を、「今日も楽しみ!」「明日も来たい!」と思える内容にしてみてもどうでしょうか。もちろん、それぞれの会のプログラムを考えるのは児童生徒です。例えば、「1問クイズ」「楽しかったことスピーチ」等です。

朝の会・帰りの会の内容を設定したら、1年間同じ内容で継続する学級が多いのではないのでしょうか。

「効果がなさそうだな」と感じた活動は思い切って年度の途中でも変えてみましょう。試行錯誤しながら、よりよい活動を探っていきましょう。



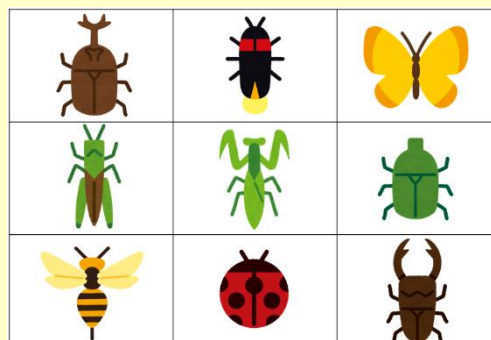
朝の会や帰りの会のプログラムを見直してみてもいいかもしれません。

コラム 集会活動にどうですか？

児童生徒にとって扱いやすく、馴染みのあるカメラアプリを用いた取組の例として、ビンゴゲームを紹介します。一般的にはビンゴカードを使用すると思いますが、カメラアプリを使って撮影した写真を、プレゼンテーション用ソフト等を活用してカードを作成し、写真ビンゴとして楽しむことができます。低学年の児童でも、フォーマットを作っておけば写真撮影から貼り付けまでできます。

集会活動では、児童生徒が企画した〇〇大会等があると思いますが、ビンゴの他にも、クイズで盛り上がることもできるアプリもあります。

現在、無料で使用できるソフトやアプリが多く存在し、扱いも難しくありません。児童生徒も、実際に使用してみればすぐにできると思います。また、これらのソフトやアプリは、集会活動だけではなく、教師が理科や社会科で授業内容をビンゴやクイズにすることもできるので、ぜひ活用してみてください。



VII 同僚・保護者との関係づくり

学級づくりでは、同僚の教職員や家庭・地域等の協力を得ながら、児童生徒を指導・支援していくことが必要不可欠となります。この章では、同僚の教職員や保護者と連携する際に必要な、いくつかのポイントについて紹介していきます。

1 同僚の教職員とのかかわり

同じ職場で働く仲間として、協力・協働は欠かせないことです。学校の教育目標を具現化するためには、教師が一丸となって目標達成に向けて取り組む必要があります。では、他の教師との協力体制をつくるには、どうすればよいでしょう。それには、日常のコミュニケーションをしっかりととるようにすることが求められます。



(1) 同僚とのコミュニケーション

●あいさつはきちんと、受け答えはハッキリ

人間関係の基本は、あいさつです。爽やかなあいさつは、相手に清潔感や清々しさを与え、信頼感を作り上げると言っても過言ではありません。

特に学校では、教師は児童生徒たちの手本となるわけですから、教師がしっかりあいさつすることで、あいさつができる児童生徒が育ちます。また、日常のやり取りでハッキリ受け答えをすることは、仕事が円滑に進むことへとつながります。

●仕事は共に取り組み、共に進める姿勢をもつ

自分が困っているとき、誰かが助けてくれる。そんな職場は、人間関係が円滑で仕事もはかどります。まずは自分としてできることを考えるとともに、他の教職員と一緒に作業することで、コミュニケーションが増え情報交換の場ともなります。

●職員室での会話は情報の宝箱

児童生徒のことを日常的に話し合い、共通理解を図ることや学習指導や生活指導について教師それぞれの経験や知識を共有し合うことは、仕事を円滑に進める上でとても有効なことです。そして、困っていることなどを話し合い、お互いにアドバイスし合う事ができれば、一人で困ったり悩んだりしなくてもよくなります。

心掛けたいことは、「愚痴」の共有ではなく、これからのことについて前向きで建設的な会話をすることです。



●約束、時間を守る

約束や時間を守らないことは他の人の仕事に支障をきたします。また、時間は貴重なので、人間関係にも支障をきたすことがあります。教師は、約束や時間の使い方について児童生徒に指導・支援する立場です。まずは自らが率先垂範したいところです。

(2) 同僚とのコミュニケーションの留意点（悩みごととは一人で抱え込まない）

学校の仕事で大切なことは、組織として対応することです。このために自ら積極的にコミュニケーションをとり、自分が今取り組んでいる仕事を他の教師に知ってもらうことが大切です。悩みごとなど一人で抱え込むことなく、みんなに知ってもらうことで助けてもらえることもあります。教師同士、お互いに支え合うことが求められます。

●「ホウ・レン・ソウ」は確実に!

何か困ったことがあったとき、何事も早めに相談することで適切な対応ができ、大きなトラブルを回避できます。このために、自分のやっていることをオープンにして常日頃から理解してもらうことが大切です。「報告・連絡・相談」は社会人としての基本です。

●質問上手、教わり上手になろう

学校は、“教えるプロの集団”です。常に、相手への敬意を払い接することを心掛けながら、質問上手、教わり上手な教師になりましょう。どの教師にも自信をもって語れる得意分野があります。そのような教師に積極的に質問して教わることで、教師力を高めていくことができます。

●養護教諭と連携しよう

学校の教師集団の中で、担任も知らない児童生徒の情報をつかんでいるのが養護教諭です。また、気になる児童生徒と一緒にになって見守ってくれます。養護教諭とは定期的に情報交換を行い、連携を深めていくことが大切です。



「ホウ・レン・ソウ」マニュアル

◇報告・連絡・相談で一番重視したいのは「相談」です。

ただ現在の状況を伝えるだけでなく、次に何をすべきかでしっかり話し合しましょう。

◇正確に！確実に！5W1Hを明確にして具体的に伝える。

伝えたい内容を整理し過不足なく伝えるように心がけましょう。

- | | |
|------------|--------------|
| ・When (いつ) | ・Where (どこで) |
| ・Who (誰が) | ・What (何を) |
| ・Why (なぜ) | ・How (どのように) |

◇タイミングよく！相手の状況(TPO)を考慮すること。

緊急の事態でなければ、伝える内容にあった環境で話をするのが大切です。児童生徒のプライバシーに関わる話は特に気を付けてください。

◇効率的に報告・連絡するために。

まず結果から先に伝えます。また、できるだけ早く伝えるように心がけましょう。内容は事実即して、自分の都合の悪い部分も包み隠さず伝えるようにしましょう。そして結果報告だけでなく、中間報告も忘れずに伝えましょう。

学校で働く職員は、教師だけではありません。事務職員やスクールカウンセラー等、担任とは違った面から家庭や児童生徒の状況等を把握しています。積極的にコミュニケーションを図り、情報交換をするよう努めましょう。



(3) チームワークづくりに求められるバランス感覚

●組織としての成長

チームワークづくりで一番のポイントは、みんなで協力し、みんなで成長するという考え方です。自分の役割を自覚し、きちんと役割を果たすことが大切です。組織の中の一人としての自分の存在をしっかりと捉えることが必要です。



●自分の持ち味を生かす

教師には、それぞれ得意とする分野があります。個々の持ち味を生かすことで、より一層チームとしての力を発揮します。また、お互いの不足する部分をフォローし合うことも大切です。

●謙虚に成長を求める姿勢

周囲の教師からのアドバイスや援助は謙虚に受けとめ、自分の成長の糧としましょう。いつでも温かく見守ってくれる先輩教師の存在も必要ですが、時には厳しく率直に意見を述べてくれる先輩教師も自身の成長のためには大切な存在です。

学校が組織として機能している姿は、児童生徒や保護者に対して安心感を与え、学校や教師に対する信頼感がアップします。チームワークを大切にして仕事に取り組みしましょう。



2 保護者は児童生徒の成長と一緒に見守るパートナー

児童生徒の生活の場は学校だけではありません。家庭と学校が連携して児童生徒を育てていくことが重要です。児童生徒には、家庭生活での個人としての姿と、学校での集団の中での姿があります。その異なる姿を教師と保護者がお互いに理解していくことが大切です。共に児童生徒を育てるという姿勢をもち、担任・学校からの情報発信を積極的に行うとともに、保護者の考えをしっかりと聴き、誠意をもった発言を心がけ、立場の違う教育観の相互理解を図り、連携を深めていかなければなりません。ただし、連携を深めると言っても慣れ合いや迎合は避けなければなりません。

(1) 積極的な情報発信で学校や担任の教育に対する理解を得る

保護者に対して、学校の教育目標や担任の「教育観」や「生徒指導観」をしっかりと説明し理解を得ることが重要です。タイムリーな情報発信を心がけることで、信頼関係を築くことができます。

●情報発信の機会を大切にする

保護者会や授業参観等、直接顔を合わせて話ができる機会は、特に大切にしたいものです。明快に手際よく情報を伝えることができるよう、十分に準備を整えて臨まなければいけません。

また、学級通信を発行することは、保護者から理解を得る手段の一つです。作成する場合は学級通信のポイント（下のコラム参照）に従い作成し、無理のないペースで継続的に発行するようにします。

●学校での様子を伝えるときは具体的なエピソードを添える

保護者と直接話す機会では、「優しい子」「頑張り屋さん」などの抽象的な言い回しではなく、学校生活での具体的なエピソードを交えて伝えることが大切です。特に、児童生徒の「いいところ」を知っておくことは、保護者との関係を良好に導きます。

コラム 学級通信・授業参観・保護者会のポイント

●学級通信のポイント

- ◇誤字脱字・言葉の誤用・誤解を与える表現はかえって信頼を失うので注意する。
- ◇表題や構成を工夫して分かりやすい表現で読みやすくし、文章だけでなく写真やイラストを載せる。
- ◇公平公正、全ての児童生徒を紹介し、児童生徒にとってマイナスな表記はしない。
- ◇人権やプライバシーの保護に十分配慮する。
- ◇配付前に必ず管理職等のチェックを受ける。

（固執した文章は避け、客観的な視点を心がけましょう。）

- ◇無断転載、出典先不明のイラストや資料に注意する。

●授業参観のポイント

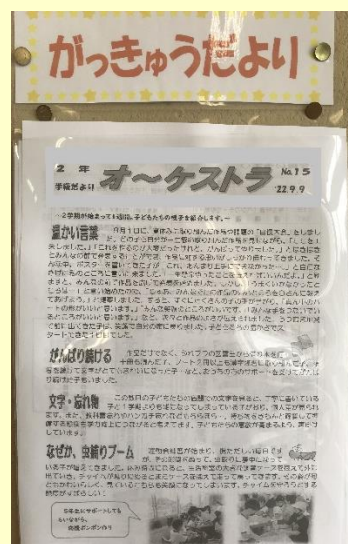
- ◇教室環境（児童生徒の掲示物等）を整える。
- ◇児童生徒が活躍できる授業を計画する。
- ◇保護者の意見や感想を集めて、授業改善に生かす。
- ◇欠席された保護者にも用意した資料を配付して理解を促す。

●保護者会のポイント

- ◇構成的グループエンカウンター等を活用して和やかな雰囲気で始める。
- ◇資料には、保護者のニーズに合わせた情報を掲載して家庭でも活用してもらう。
- ◇欠席された保護者にも用意した資料を配付して理解を促す。

※ 保護者宛て文書は、授業で使用するプリント等とは違い、外部へ発行する文書です。

文書の作成に際し、著作権の侵害が無いように注意してください。



(2) 保護者の思いを上手に受けとめるには

できるだけ早い時期に、保護者の思いを受けとめることが大切です。どの保護者も学校での自分の子供の様子や学級の様子が気になっています。また、保護者は自分の子供を伸ばしたいと思っており、子育てに関する情報などを求めています。そういった保護者のニーズをつかみ保護者会や面談等で対応していくことが保護者との連携を深めます。

●印象を大切にする

清潔感があり、いつも元気で明るく児童生徒と接し、一生懸命に頑張る姿勢は大切です。もちろん、見た目だけでは信頼できる教師か否かは決まりませんが、よい印象をもたれることに越したことはありません。

●保護者への対応は礼節をわきまえて

保護者と接するときは、常に感謝の気持ちと敬意をもち、社会人としての礼節と言葉遣いを心がけることが大切です。コミュニケーションがよくとれていても、なれなれしい態度はとらないように気を付けなければなりません。特に、相槌は「うん」ではなく、「はい」で打てるようにしましょう。

●保護者の思いを受けとめる第一歩は傾聴

保護者の話は、受容的・共感的な態度で否定せず、途中で口をはさまず最後まで聴くことが大切です。

穏やかな対応を心がけ、うなずき、繰り返しによる確認などを行い共感的な態度を示しながら話を聞くよう心がけます。

保護者の思いをしっかりと受けとめることで信頼関係が生まれます。傾聴の姿勢が大切です。



●保護者と協働する

教育活動に参加している保護者は、積極的な学校への協力者です。学校に足を運んでいただける保護者だからこそ、学校の教育活動を真剣に考えており積極的な意見をいただくことができます。また、学級担任の理解者にもなってくれるため、このような保護者と協力して学級保護者会などを活性化し、他の保護者にも働きかけながら連携を深めていきます。

コラム 傾聴とは



「耳」「目」「心」を傾け、真摯な姿勢で相手の話を聴くことです。

相手の話を、相手の立場に立って、相手の気持ちを共感しながら理解に努めます。また、相手の背景に肯定的な関心をもち、分からないことは臆測で理解せず、質問し、相手と自分に対して誠実な態度であることが大切です。

(3) 保護者との連携における留意点

●日常的に保護者との連絡を心がける

問題があるときだけではなく、児童生徒のよい言動等について日常から積極的に情報を発信する事が大切です。電話は手軽な連絡手段ですが、込み入った内容などは、直接会って話をするように心がけます。

●ミスをそのままにしない

手紙の配り忘れや連絡の間違い等、教師であっても人間なのでミスは当然ありうることです。大切なことは、ミスをしてしまった時こそ、そのことを認め事態が大きくならないよう、丁寧かつ、迅速に対応して、ミスそのもの以上のトラブルにならないようにします。

●記録をとる

どんなことでも必ず記録を残すようにします。記憶は時間が経てば曖昧になります。折角いただいた建設的な意見も忘れてしまつては、保護者の思いを受けとめたことになりません。また、相談事や苦情といった内容であれば、日時や場所、発言内容や行動等まで、できるだけ正確に記録しておきます。なお、記録の取り扱いや保管の仕方には十分に気を付ける必要があります。

●迅速かつ適切な対応を心がける

保護者の思いを受けとめたら、それを反映した行動をおこします。必要があれば管理職等とも相談し、学校として組織的な対応をとります。迅速かつ適切な対応をすることで、保護者からの信頼を得て連携がより一層深まります。

●事後報告までしっかり行う

保護者の思いに対して対応した後、事後報告まできちんと行い、連携を深めていきます。事後報告がなければ不信感につながるので注意します。

●保護者の意見に学ぶ

保護者からの意見には、担任としての反省点を気付かせてくれたり、指導方法を改善したりするためのヒントが沢山あります。言葉を冷静に受け止め、教師人生の財産として蓄積することが大切です。

ちょっとした連絡には連絡帳はとても便利です。ただし、込み入った内容やプライバシーに関することなどは、封書を利用するか、電話や直接対話をしましょう。

また、電話は非常に便利ですが、連絡事項の伝達にとどめます。児童生徒の問題行動や学校からの依頼や釈明・お詫び等は、直接顔を合わせて話すようにしましょう。

保護者とのやりとりについて、学年主任や管理職への「ホウ・レン・ソウ」を確実にすることはもちろんですが、後回しにせず、迅速に行うことが大切です。



VIII 資料

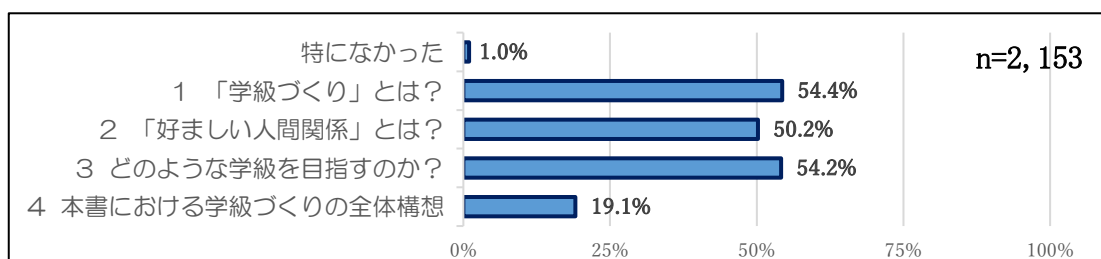
令和5年3月に改訂した本ガイドブックが、学校現場において、互いに尊重し合う好ましい人間関係を育む学級づくりに寄与するものになっているか、その有用性を調査しました。

1 アンケート調査

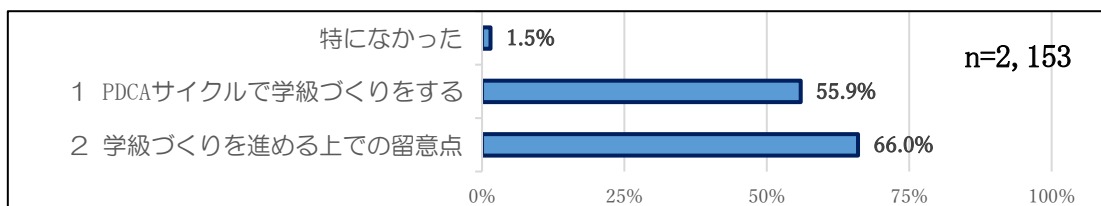
県内の1～6年目の教員（講師経験含む）のうち、「本調査に協力できる方」を対象に、アンケート調査を実施しました。その結果、2,153名の教員から回答を得ました。

(1) 「(各章・項目毎) ガイドブック中で参考になったことは? (複数回答可)」

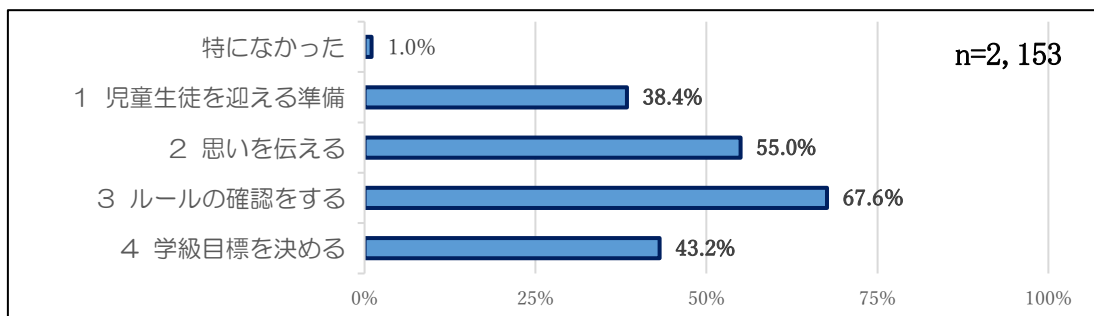
「Ⅰ章 はじめに【学級づくり理論編】」を読んで参考になったこと (複数回答可)



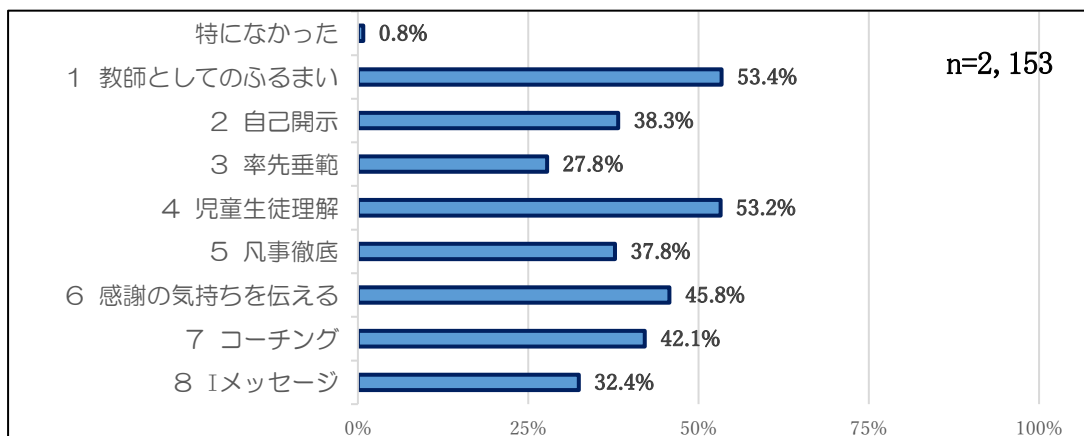
「Ⅱ章 学級づくりの進め方」を読んで参考になったこと (複数回答可)



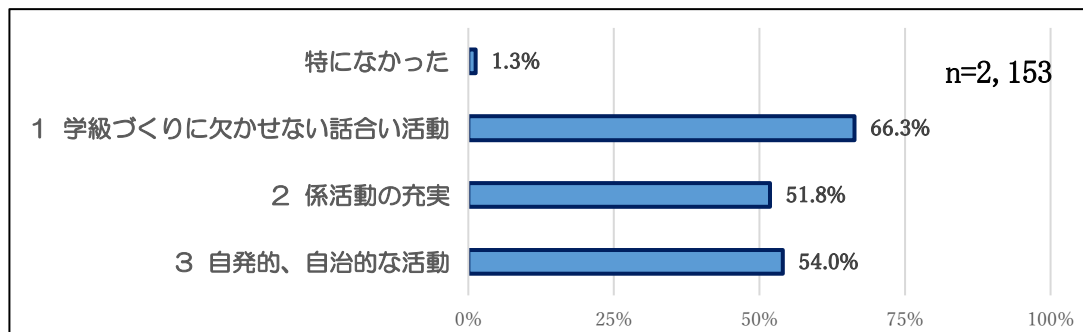
「Ⅲ章 学級開き」を読んで参考になったこと (複数回答可)



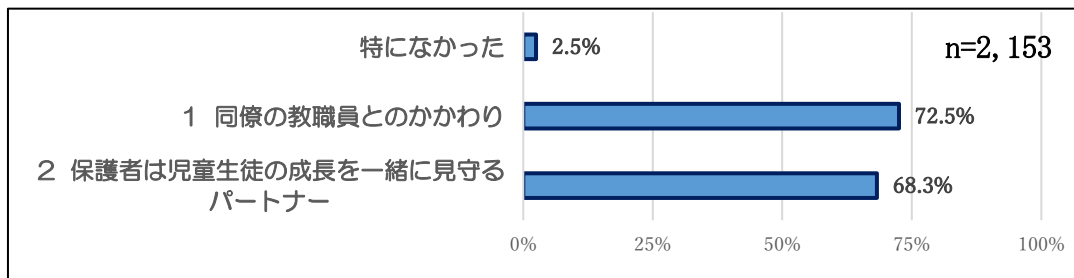
「Ⅳ章 教師と児童生徒の信頼関係」を読んで参考になったこと (複数回答可)



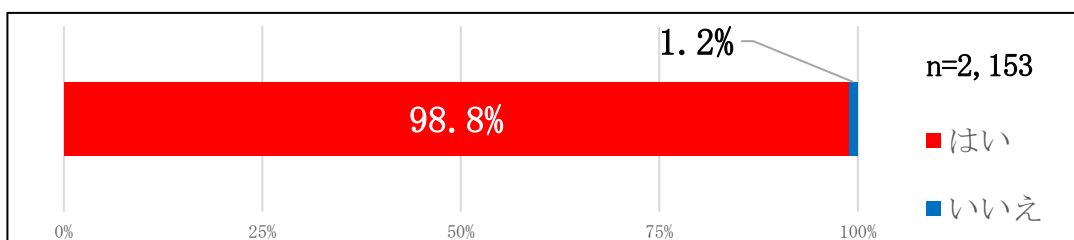
「Ⅵ章 主体的に活動できる学級」を読んで参考になったこと（複数回答可）



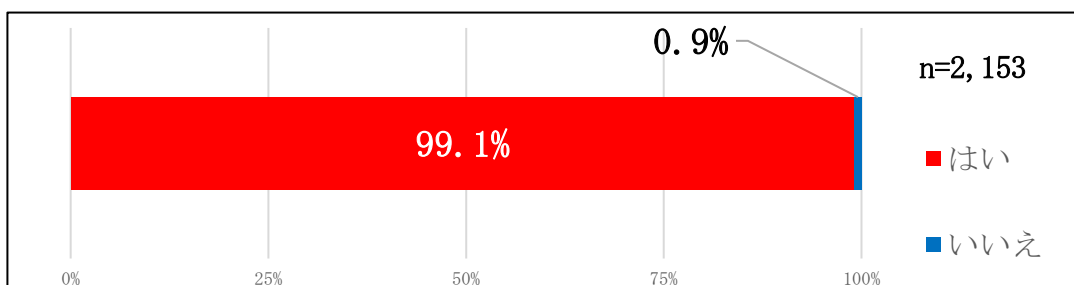
「Ⅶ章 同僚・保護者との関係づくり」を読んで参考になったこと（複数回答可）



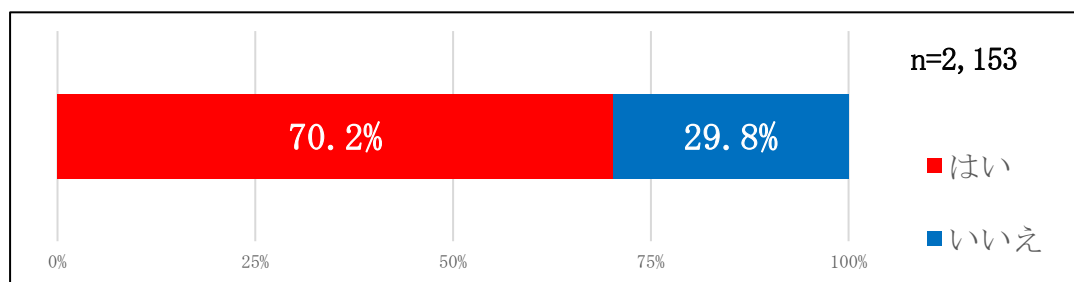
(2) 「ガイドブックは分かりやすく、理解できるものになっていた？」



(3) 「ガイドブックは学級づくりの助けになると思う？」



(4) 「ガイドブックに書かれたことの中で、実際に実践してみたことがある？」



2 モニターによる活用調査

本ガイドブックの実用性等を調べるために、学級担任等を務める教員に、本ガイドブックを学級づくり等の機会に活用してもらいました。

22名の教員（県内小・中・義務教育学校に在籍する1年目から37年目の教員）に、本ガイドブック活用（以下、「モニター」）を依頼し、約2か月の期間において電話によるインタビュー調査を行いました（校種別の内訳は小学校14名・中学校7名・義務教育学校1名）。

(1) 「(各章・項目毎) ガイドブック中で実践したことと、その結果は？」

モニター	ガイドブック中で実践したこと	・実践結果（○・△・不明） ・実践により表れた結果（子供の反応・自身の感想等）
1	小学校 Ⅱ章「継続しよう」等	○ 子供の頑張りを見える化することで、 <u>努力を続ける子供が増えた。</u>
2	Ⅱ章「スモールステップで支援しよう」等	○ 子供たちが「次はこれをやってみよう」と、 <u>さらに上の目標を設定していくようになった。</u>
3	Ⅱ章「スモールステップで支援しよう」等	○ <u>不登校児童への働きかけで、段階を踏んだ目標設定により、少しずつ学校になじめた。</u>
4	Ⅲ章「思いを伝える」等	○ <u>道徳授業で視覚化して情報を伝えることを意識すると、子供の反応がよかった。</u>
5	Ⅳ章「感謝の気持ちを伝える」等	○ <u>1年生児童が、自分の係以外のことにも積極的に取り組むようになった。</u>
6	Ⅳ章「1メッセージ」等	○ <u>1メッセージの視点をもって話すと子供の反応がよかった。</u>
7	Ⅳ章「感謝の気持ちを伝える」「1メッセージ」等	○ <u>1メッセージや言葉遣いを意識したり、感謝の気持ちノートを活用したりしたことで子供からの「ありがとう」が増えた。</u>
8	Ⅳ章「児童生徒理解」等	○ <u>視覚を通して見通しをもたせることで、自己決定できる子供が増えた。</u>
9	Ⅴ章「行事・クラス会議」等	○ <u>話し合いが活発になり、子供同士の関わり合いをたくさん作ることができた。</u>
10	Ⅵ章「話し合い活動の事前準備」等	○ <u>学級委員が話し合いの流れを理解することで、準備ができ、話し合うことができた。</u>

モニター		ガイドブック中で実践したこと	・実践結果（○・△・不明） ・実践により表れた結果（子供の反応・自身の感想等）
11	小学校	Ⅵ章「話し合い活動の形態」等	○ 子供たちがスムーズに話し合いをすることができた。
12		Ⅶ章「同僚の教職員とのかかわり」等	○ 連携における留意点を意識することで情報共有ができ、とても役に立った。
13		Ⅶ章『『ホウレンソウ』マニュアル』等	○ ホウレンソウによる気持ちの安心感が違う。 <u>心が軽くなり、安心して仕事ができる。</u>
14		Ⅶ章「同僚の教職員とのかかわり」等	○ <u>同僚と助け合ったり教え合ったりできて情報交換でき、業務改善にもつながると感じた。</u>
15	中学校	Ⅱ章「PDCA サイクルで学級づくり」等	○ <u>計画をすることについて、自分自身が意識をするようになった。</u>
16		Ⅲ章「ルールの確認をする」等	○ ルールの目的を生徒と一緒に考えることで、 <u>ルールを守ろうとする生徒が増えた。</u>
17		Ⅳ章「自己開示」等	○ 自分が苦手なことやできないことを生徒に示すことで、 <u>気持ちが楽になった。</u>
18		Ⅳ章「Ｉメッセージ」「自己開示」等	○ <u>生徒が目を見て、心を開いて話をしてくれているような実感がある。今まで距離を感じていた生徒とも、少し距離が縮まったように思う。</u>
19		Ⅴ章「行事」等	○ 上級生に頼ってばかりだったが、行事を通して「自分たちで成功させよう」と、 <u>協力する気持ちが育まれてきた。</u>
20		Ⅵ章「話し合い活動の進行」等	○ 教師が話し合い活動の見通しをもつことにより、それが <u>生徒の主体的話し合いにつながった。</u>
21	義務	Ⅶ章「傾聴」等	○ <u>保護者との距離が縮まった。保護者から子供の様子を積極的に話してくれるようになった。</u>
22		Ⅱ章「学級づくりの進め方」等	○ 教務主任として、若年層の先生方を OJT で支援するのに活用した。自分自身の経験も併せて話すことで、 <u>よい研修資料となった。</u>

(2)「ガイドブックは子供たちの『よりよい人間関係づくり・自己有用感』の育成に役立てられたか？」

①そう思う ②ややそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない				
ガイドブックについての質問内容	①	②	③	④
ガイドブックは、よりよい人間関係づくりに役立ったと思いますか。	18	4	0	0
<「(やや) そう思う」理由> ○人間関係づくりの具体的なことがあって活用しやすかった。 ○教師と児童・児童同士・保護者・同僚の人間関係づくりについて書かれているのでよかった。				
ガイドブックは、子供たちが自己有用感(「人の役に立った・喜んでもらえた」というような感覚)をもてるようになることに役立ったと思いますか。	12	8	2	0
<「(やや) そう思う」理由> ○「感謝を伝える」を通して、子供たちが自分が役に立っているという思いをもつことに役立てられた。 ○係活動の充実を図ることで、自己有用感をもてる子供が増えた。 <「あまりそう思わない」理由> ●学級の実態に対して、思うような取組ができず、成果が感じられなかった。 ●実践したが、目に見えた効果が出ているとは思わないから。				

アンケートやインタビュー内容についての分析結果については、下記二次元コードから調査研究報告書にアクセスし、ご覧ください。

(令和5年度調査研究報告書)





～すべては千葉の子供たちと先生方の笑顔と未来のために～



○主な参考文献・引用文献等

- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」2017
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」2017
- ・文部科学省「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編」2017
- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）」2017
- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」2017
- ・文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編」2017
- ・文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）」2018
- ・文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 総則編」2018
- ・文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 特別活動編」2018
- ・文部科学省「生徒指導提要（令和 4 年 1 2 月）」
- ・国立教育政策研究所
「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）」（教師向けパンフレット）2018
- ・学級づくりガイドブック 千葉県総合教育センター 2013
- ・改革のカリスマ直伝！15 歳からのリーダー養成講座 工藤勇一 冬舎 2022
- ・子どもたちに民主主義を教えよう一対立から合意を導く力を育む 工藤勇一・苫野一徳 あさま社 2022
- ・アドラー心理学で変わる学級経営 勇気づけのクラスづくり 赤坂真二 明治図書 2020
- ・アドラー心理学で変わる学級経営 学級崩壊と荒れに向き合う 赤坂真二 明治図書 2021
- ・アドラー心理学でクラスはよみがえる 叱る・ほめるに代わるスキルが身につく 野田俊作・萩昌子 創元社 2020
- ・つながり 上篠大志 東洋館 2022
- ・新任 1 年目なのに、学級担任が驚くほどうまくいく本 中嶋郁雄 2020
- ・ICT×学級経営 GIGA スクールに対応した教室アップデート 藤原光政 明治図書 2021
- ・授業力&学級経営力 2022. 2 月号 No. 143 明治図書「自治的なクラス，自立した子どもが育つ学級システム大全」
- ・授業力&学級経営力 2022. 6 月号 No. 147 明治図書「こうすれば『話し合い』がもっとうまくいく！」
- ・授業力&学級経営力 2023. 2 月号 No. 155 明治図書「子どもがいきいき動き出す！当番 係活動大全」

○研究講師及び実践校（協力者）一覧 （敬称略）

○講師

千葉大学グランドフェロー・敬愛大学教育学部教授 土田 雄一

○実践校及び協力者

浦安市立入船中学校

浦安市立入船小学校

野田市立第二中学校

柏市立柏中学校

教諭 村政 雄輝

柏市立光ヶ丘小学校

教諭 八尋 あかり

我孫子市立根戸小学校

教諭 杉本 一生

佐倉市立下志津小学校

教頭 石塚 良哉

神崎町立神崎小学校

教諭 森 智子

銚子市立本城小学校

教諭 臼倉 恭子

東金市立東小学校

教諭 巖谷 侑希

横芝光町立横芝小学校

教諭 北田 知也

白子町立南白亀小学校

教諭 田邊 ひとみ

木更津市立西清小学校

教諭 川名 祥啓

○研究担当職員

〈令和3年度〉

千葉県総合教育センター カリキュラム開発部

	部長	丸山 誠一
研究開発担当	主席研究指導主事	福中 義宏
	研究指導主事	濱田 素子（主担当）
	研究指導主事	竹政 崇典
	研究指導主事	米塚 丈泰

〈令和4年度〉

千葉県総合教育センター カリキュラム開発部

	部長	鈴木 康治
研究開発担当	主席研究指導主事	鈴木 賢一
	研究指導主事	米塚 丈泰（主担当）
	研究指導主事	宮野 勝典
	研究指導主事	橋本 淳
	研究指導主事	竹政 崇典

〈令和5年度〉

千葉県総合教育センター カリキュラム開発部

	部長	鈴木 賢一
研究開発班	主席研究指導主事	安田 国土
	研究指導主事	串田 篤則（主担当）
	研究指導主事	中井 博明
	研究指導主事	清水 健広
	研究指導主事	田邊 佳之
	研究指導主事	橋本 淳

研究報告 第459号

令和6年3月

編集発行者 千葉県総合教育センター所長 鉄井 修一

発行所 千葉県総合教育センター

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2丁目13番地

TEL 043（276）1166

FAX 043（276）5128



みんなで取り組む 千葉の教育

千葉県総合教育センター